垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書（12）

垂水島津家墓所（心翁寺跡）調査報告書

平成三一年三月

垂水市教育委員会

巻頭図版１

垂水島津家墓所（心翁寺跡）遠景

巻頭図版２

墓所全景

巻頭図版３

⑴上段（A-C区）遠景　⑵下段（D-K区）遠景

序文

大隅半島の北西部に位置する垂水市は、眼前に鹿児島湾の美しい海岸線を望み、背後には手つかずの自然が残る高隈の山々が連なっています。このように美しい自然に育まれた本市においては、昔から多くの人々が生活を営み、文化を育んでおり、多くの有形・無形の文化財が残されています。

本報告書は、国宝重要文化財等保存整備費補助金により実施された、垂水島津家墓所の埋蔵文化財発掘調査を記録としてまとめたものです。

垂水島津家墓所は、近世に垂水を統治してきた垂水島津家の四代から一六代までの当主墓をはじめ多数の石造物の存在する場所と知られ、平成二〇年に垂水市の史跡に指定されています。

垂水市教育委員会は、当該史跡の国指定史跡を目指し、平成二八年度より複数年にわたり墓地及び墓石の基本情報収集のための調査を行ってきました。本書は、その概要を報告書としてまとめたものです。

この報告書が、市民をはじめ広く活用され、本市の歴史解明や文化財の保護・活用の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、多大なご指導・ご協力をいただきました鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島大学をはじめとする各研究機関、発掘調査及び整理作業協力者をはじめとする各関係各位に心から敬意を表します。

平成三一年三月

垂水市教育委員会

教育長　坂　元　裕　人

例言

一　本書は鹿児島県垂水市田神上ノ平添三二八番地二及び三二八番地四に所在する垂水島津家墓所（心翁寺跡）の文化財報告書である。

二　調査は、垂水市教育委員会社会教育課が、平成二八年度～平成三〇年度にかけて実施した。調査は国庫補助を得て実施した。

三　調査及び整理作業は、文化庁記念物課、鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島大学渡辺芳郎教授の指導を受けて実施した。

四　調査のうち垂水島津家墓所全体地形測量、当主墓碑および基壇等石造物実測、周辺石造物（石幢・燈篭・亀趺碑）実測（第四章第四節）については大福コンサルタント株式会社、空中写真撮影については株式会社ふじたと委託契約を結び実施した。

五　第四章第二節における石材同定は、鹿児島大学名誉教授大木公彦先生にお願いした。

六　史料調査及び石造物の刻字判読については、垂水市文化財保護審議会の御協力・御指導をいただきながら実施した。特に、第四章第四節の亀趺碑の碑文解読については、垂水市文化財保護審議会瀬角龍平会長の御指導を賜った。

七　本文中に職業・身分・身体などに関する卑称・僭称が使用される箇所があるが、本書ではそれらの名称をそのまま使用した。これは歴史的事実を正しく認識するためであり、差別を助長・容認するためのものではない。

八　確認発掘調査における図面作成・写真撮影は羽生文彦、大瀬幸代、明石雄允が行った。整理作業における遺構・土層断面図のトレースは羽生、隈﨑静花が行った。出土遺物の実測・トレースは大福コンサルタント株式会社へ委託した。

九　成果に関する資料は、垂水市教育委員会が保管している。

十　報告書の刊行に至るまで、山下信一郎氏、黒川忠広氏、平美典氏、鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島市教育委員会文化財課の各氏・各機関からは多大なご配慮をいただいた。

特に、「藤井大祐二〇一七『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（80）薩摩藩主事島津家墓所（福昌寺跡）調査報告書』」からは多大に引用をさせていただき、また、報告書の内容も基本的には福昌寺跡報告書の内容を踏襲する形で記している。すなわち、福昌寺跡報告書無しに本報告書の完成は為しえなかった。藤井氏には発掘調査の段階から様々な形で御指導・御支援を賜ったが、紙面を借りて深謝の意を表したい。

また、左記の方々からもご指導・ご協力をいただいた。ご芳名を記して感謝の意を表する。（敬称略、五十音順）

川﨑あさ子、瀬角龍平、姶良市教育委員会社会教育課、指宿市教育委員会社会教育課、さつま町教育委員会社会教育課

一一　本書の編集は羽生が担当した。

凡例

一　本報告書で使用した地図は、国土地理院発行一／二五〇〇〇地形図「垂水」である。

一　所収史料は、項目ごと、年ごとで区切り、本報告書における史料番号を付し、出典名・出典番号・史料本文の順で記載した。月日は、記事中のものとした。

一　本報告書における字体については、一部の固有名詞を除き、常用漢字を原則とし、変体仮は仮名に改めたが、助詞の「者」「与」「茂」「江」「而」などはそのまま表記した。

一　年次は和暦を基本とし、必要に応じて西暦を〔　　〕で記した。

一　本文の虫損・破損、字画の不明瞭及び解読不能は□であらわした。

一　編者が加えた傍注は次のようにあらわした。

（例）誤字や疑いがあるとき　〔　カ〕

（例）文字の脱落と思われるとき　〔　脱カ〕

（例）誤字や疑いがあるが、原本のままにしたとき　〔ママ〕

（例）その他傍注　〔　　〕

一　敬意を示す闕字・平出等は、原則として底本の体裁によった。

一　史料によって前略・中略・後略したものもある。

一　史料のレイアウトは、原体を損なわない範囲で、高さなどを揃えたところもある。

一　刊本より引用した史料は基本的に底本のままにしているが、引用にあたっては前掲の事項に加え、次の通りとした。

・行間の書き込み、原註は原則として底本の体裁にあわせたが、書き込みや原註が多くてまぎらわしい場合は、その位置を示し、関連箇所の文末にまとめた。

・原註には括弧を付さず、刊本の編者により新たに付された註は（　　）で囲み、人名、地名及び難解な語句などに付された傍註については対応する語句の末尾に移動させた。

・挿入、付紙、押札等や、朱書に関する傍註は省略した。

・本報告書の編者が付した註は〔　　〕で囲み、原註及び刊本編者の付した註と区別した。

・「。」を省略したり、「、」に置き換えたりしたものもある。

・漢文は、返り点・送り仮名等不統一または不正確に用いられているが、特に底本の通りとした。

・当時一般に使用された用字のうち、次のようなものはそのまま用いた。

麑（鹿児）

一　図・表番号は通しとした。

一　参考資料・文献等は文末や各章節末に示した。

一　報告書に掲載した各挿図の指示は以下のとおりである。

・挿図の縮尺は、個々にスケールを入れて示した。

・方位は磁北を示した。

・水平基準は海抜高で、単位は（メートル）である。

一　第三章における土層の色調表記は『新版標準土色帳』に基づく。

目次

巻頭図版
序文
例言・凡例
第一章　経過
第一節　調査に至る経緯と経過……1
第二節　発掘調査の経過……3
第三節　発掘作業の経過……3
第四節　整理等作業の経過……5
第二章　遺跡の位置と環境
第一節　地理的環境……6
第二節　歴史的環境……7
第三節　垂水島津家と心翁寺……11
第三章　発掘調査
第一節　心翁寺跡における既往の調査……28
第二節　発掘調査の方法……29
第三節　第一次調査……32
第四節　第二次調査……40
第四章　石造物調査
第一節　調査の方法と成果概要……45
第二節　石造物の石材……48
第三節　石造物の遺存状況……50
第四節　石造物各説……52
第五節　各区の状況……85
第六節　当主墓と周辺石造物……95
第五章　史料調査
第一節　調査の方法と史料概要……100
第二節　当主の死と葬礼……100
第三節　当主墓域の形成……103
第六章　総括
第一節　調査の成果概要……113
第二節　垂水島津家墓所……118
第三節　まとめと課題……120
附表……124
史料……136
図版
抄録

図版目次

巻頭図版1　垂水島津家墓所（心翁寺跡）遠景
巻頭図版2　墓所全景
巻頭図版3　(1)上段（A-C区）遠景
　　(2)下段（D-K区）遠景
図版1　石造物1（墓碑）
図版2　石造物2（墓碑）
図版3　石造物3（墓碑）
図版4　石造物4（墓碑）
図版5　石造物5（墓碑・石幢）
図版6　石造物6（石幢・燈籠）
図版7　石造物7（燈籠）
図版8　石造物8（燈籠）
図版9　石造物9（燈籠）
図版10　石造物10（燈籠）
図版11　石造物11（碑・手水鉢）
図版12　石造物12（手水鉢・その他）
図版13　発掘調査1（第1次）
図版14　発掘調査2（第1次）
図版15　発掘調査3（第2次）
図版16　発掘調査4（第2次）
図版17　出土遺物

挿図目次

図1　心翁寺及び周辺遺跡地図……8
図2　垂水市近世歴史地図……10
図3　垂水島津家略系図……16
図4　垂水島津家菩提所位置図……20
図5　『三国名勝図会』の心翁寺……24
図6　正保二年（一六四五）の縄張帳（一部）……25
図7　墓所の区画と当主墓の位置……28
図8　垂水島津家墓所地形測量図……30
図9　発掘調査実施箇所……33
図10　一トレンチ最終平面・断面図……35
図11　一トレンチ基壇下に位置する敷石状の石造物……36
図12　二トレンチ断面図・周辺石造物配置図……37
図13　二トレンチ地業検出状況……38
図14　三トレンチ最終平面図・断面図……41
図15　四トレンチ平面図・断面図　五トレンチ平面図・断面図……42
図16　発掘調査出土遺物……44
図17　垂水島津家墓所石造物配置図……46
図18　鹿児島県火砕流分布図……49
図19　石造物にみるユータキシティック構造……50
図20　石造物の石材分布図……51
図21　墓碑の各部名称……52
図22　四代久信墓と基壇……56
図23　五代久敏墓と基壇……57
図24　六代忠紀夫婦墓と基壇……58
図25　七代久治夫婦墓と基壇……60
図26　八代忠直夫婦墓と基壇……62

図27　九代貴儔夫婦墓と基壇……64
図28　一〇代貴澄夫婦墓と基壇……66
図29　一一代貴品夫婦墓と基壇……68
図30　一二代貴柄夫婦墓と基壇……70
図31　一一代貴品後室墓と基壇……72
図32　一二代貴柄後室墓と基壇……73
図33　一三代貴典墓と基壇……74
図34　九代貴儔息女墓と基壇……76
図35　六代忠紀石幢と基壇……77
図36　燈籠の各部名称……78
図37　島津宗家墓所（福昌寺跡）における燈籠の分類……78
図38　亀趺碑……82
図39　燈籠、層塔、火縄銃形の献燈……84
図40　A区石造物配置図……85
図41　B区石造物配置図……86
図42　C区石造物配置図……87
図43　D区石造物配置図……88
図44　E区石造物配置図……89
図45　F区石造物配置図……90
図46　G区石造物配置図……91
図47　H区石造物配置図……92
図48　I区石造物配置図……93
図49　J区石造物配置図……94
図50　K区石造物配置図……94
図51　当主墓と周辺石造物①……95
図52　当主墓と周辺石造物②……98
図53　当主墓と周辺石造物③……99
図54　六代忠紀墓域の周辺石造物寄進者……108
図55　七代久治墓域の周辺石造物寄進者……108
図56　八代忠直墓域の周辺石造物寄進者……109
図57　九代貴儔墓域の周辺石造物寄進者……109
図58　一〇代貴澄墓域の周辺石造物寄進者……110
図59　一一代貴品墓域の周辺石造物寄進者……110
図60　一一代貴品後室墓域の周辺石造物寄進者……111
図61　一二代貴柄墓域の周辺石造物寄進者……111
図62　一二代貴柄後室墓域の周辺石造物寄進者……112
図63　一三代貴典墓域の周辺石造物寄進者……112
図64　垂水島津家墓所の当主墓碑……114
図65　当主墓域の石造物……115
図66　墓所の区画……117
図67　一門家墓所位置図……119
図68　薩摩藩における家格と役職……121

表目次

表1　垂水島津家歴代当主一覧……17
表2　垂水島津家当主菩提所一覧……21
表3　垂水島津家当主夫人菩提所一覧……22
表4　垂水島津家当主子女菩提所一覧……23
表5　心翁寺略歴……26
表6　心翁寺歴代住職……27
表7　石造物内訳……50
表8　石造物の遺存状況……50
表9　石材別の遺存状況……50
表10　垂水島津家歴代当主の死と葬礼、祭祀者……107

表11　石造物内訳表……113
表12　墓碑内訳表……113

附表目次

附表1　石造物観察表A……124
附表2　石造物観察表B……130
附表3　遺物観察表……134

史料目次

史料1　『垂城伝誌』……136
史料2　『隅府温故集』……136
史料3　『垂城録』……137
史料4　『三国名勝図会』……138
史料5　『垂水領主島津家家譜』……138
史料6　『法規類纂』……145

第一章　経過

第一節　調査に至る経緯と経過

（一）経緯

心翁寺跡は、垂水市田神字上ノ平添三二八―二に所在する。正確な遺跡の範囲は不明であるが、現在は心翁寺跡敷地北西部に相当すると考えられる約一八〇〇㎡が垂水島津家墓所として知られている。

垂水島津家墓所は、幕藩体制下の垂水を統治してきた垂水島津家墓の四代から一六代までの当主墓をはじめ多数の石造物の所在する場所として知られ、平成二〇年、垂水市の史跡に指定されている。

平成二一年、文化庁文化財部記念物課は島津家宗家墓所のほか、一門家墓所、一万石以上の家臣墓所を一つのまとまりとし、近世大名家墓所としての国史跡化について働きかけを行った。これを受けて鹿児島県教育庁文化財課は、宗家及び一門家、一万石以上の家臣墓所の所在する鹿児島市（島津家宗家墓所・福昌寺跡）、姶良市（越前（重富）島津家墓所・紹隆寺跡、加治木島津家墓所・能仁寺跡・長年寺跡）、指宿市（和泉（今和泉）島津家墓所・光台寺跡）、垂水市（垂水島津家墓所・心翁寺跡）、さつま町（宮之城島津家墓所・宗功寺跡）に対し調査を打診した。

平成二三年度、鹿児島市で福昌寺跡の調査が開始された。

平成二六年度は、第一回島津家墓所調査担当者会が鹿児島県教育庁文化財課において開催され、鹿児島県・姶良市・指宿市・鹿児島市・さつま町・垂水市の調査担当者が集まり、調査の現況、事業計画等について情報交換を行った。

平成二七年度は、第二回島津家墓所調査担当者会が鹿児島市教育総合センターにおいて開催され、文化庁・鹿児島県・姶良市・指宿市・鹿児島市・さつま町・垂水市の調査担当者が集まり、調査の現況、事業計画等について情報交換を行った。

このような動きの中、垂水市教育委員会社会教育課は、「心翁寺跡（以下、垂水島津家墓所）」の国指定史跡を目指し、平成二八年度より複数年度にわたり墓地及び石造物の基本情報収集のための調査を行うことを企画した。なお、事業に際しては文化財補助事業の一環として取り組んできた。調査を行うにあたり、以下の課題を設定し実施することとした。

①石造物の変遷
②墓域の変遷
③墓所の変遷

（二）経過

平成二八年度　垂水島津家墓所は平成二〇年に垂水市指定史跡となったものの、郷土史家による略図や簡易的な配置図以外、現在に至るまで正確な測量図は存在せず、墓所内に所在する石造物の種類・数量等も明確ではなかった。そこで事業開始年度は、墓所に関する基礎情報の収集を主な目的として取り組んだ。

現地調査は、垂水市教育委員会社会教育課が調査主体となって実施した。測量や実測等については、受注者である大福コンサルタント株式会社へ委託する体制をとった。委託内容は、調査に伴う資機材の調達、地形測量・石造物平面配置図作成、墓碑実測等である。社会教育課担当者は、調査区の指定、実測する石造物の選定、調査工程の管理等を行い、受注者職員に作業段階に応じた指示等を行った。

測量業務委託の期間は、平成二八年五月二七日～一〇月三一日である。

墓碑及び基壇の実測図作成は、垂水島津家六代忠紀夫婦墓、九代貴儔夫婦墓、一〇代貴澄夫婦墓、一一代貴品夫婦墓、一二代貴柄夫婦墓を対象とし、墓碑一〇基及び基壇五基について実施した。

このほか、墓所整備に関わる情報を得るため、第一次確認発掘調査を実施した。垂水島津家墓所は上段部と下段部に分かれており、墓所中央にある石階段により行き来できるようになっているため、上段部、下段部それぞれに調査区を設けた。

発掘調査期間中、文化庁山下調査官の現地視察があった。

さらに、鹿児島大学大木公彦名誉教授の指導のもと、墓所内に所在する全ての石造物を対象とした石材調査を実施した。

このほか、第三回島津家墓所調査担当者会が宮之城歴史資料センターにおいて開催され、文化庁・鹿児島県・姶良市・指宿市・鹿児島市・さつま町・垂水市の調査担当者が集まり、調査の現況、事業計画等について情報交換を行った。

当該年度における主な取り組みについては以下のとおりである。

平成二八年五月二七日～同年一〇月三一日　現況地形図実測、石造物平面配置図作成、墓碑等石造物実測（業務委託）

平成二八年八月一七日　第三回島津家墓所調査担当者会

平成二九年一月一八日～同年二月二七日　第一次確認発掘調査

平成二九年一月二三日～翌二四日　文化庁山下調査官現地視察

平成二九年二月一七日　鹿児島大学大木名誉教授現地調査

平成二九年度　前年度に引き続き、石造物の実測を委託業務として実施した。受注者は前年度に引き続き大福コンサルタント株式会社とし、石造物実測のほかに石造物の現況写真撮影も実施した。

測量業務委託の期間は、平成二九年四月一〇日～三〇年二月二八日である。

墓碑及び基壇の実測図作成は、垂水島津家四代久信墓、五代久敏墓、七代久治夫婦墓、八代忠直夫婦墓、一一代貴品後室墓、一二代貴柄後室墓、一三代貴典墓を対象とし、墓碑九基について実施した。

また、垂水島津家墓所の特徴として、当主の供養塔である石幢（六面地蔵塔）が多く存在することがあげられるが、最大級のもので依存状態が良好な六代忠紀供養塔の実測図を作図した。

燈籠については、形状から細かい分類は可能ではあるが、福昌寺跡の燈籠のように明確に類型化を試みるほどの差異はなかったため、依存状態が良好な一〇代貴澄夫婦墓に供えられたもの一基、特徴的な形状を有する七代久治に供えられた多層塔形のもの一基、九代貴儔に供えられた火縄銃形のもの一基を対象とし、実測図を作図した。

また、七代久治に近侍した坂元盛基についての碑文が記された亀趺碑一基、廟形を呈する九代貴儔公三女銀姫墓碑一基についても対象とし、実測図を作図した。

写真撮影は、墓所内に所在する全ての石造物を対象とし、撮影を行った。

このほかに、第二次確認発掘調査を実施した。下段部の六面地蔵塔集中部に一箇所調査区を設けたほか、周辺に二つの調査区を設けた。

このほか、第四回島津家墓所調査担当者会が宮之城歴史資料センターにおいて開催され、文化庁・鹿児島県・姶良市・指宿市・鹿児島市・さつま町・垂水市の調査担当者が集まり、調査の現況、事業計画等について情報交換を行った。

当該年度における主な取り組みについては以下のとおりである。

平成二九年四月一〇日～三〇年二月二八日　墓碑等石造物実測、石造物写真撮影（業務委託）

平成二九年一二月七日　第四回島津家墓所調査担当者会

平成三〇年二月五日～同年二月二三日　第二次確認発掘調査

平成三〇年度　空中撮影、文献調査、調査報告書作成を実施した。

空中撮影は、受注者である株式会社ふじたへ委託する体制をとった。委託内容は、遺跡の空中撮影・写真の現像及びデータ化等である。社会教育課担当者は、撮影場所や角度等について受注者職員に指示等を行った。

出土遺物実測は、垂水市教育委員会社会教育課が調査主体となって実施した。実測等については、受注者である大福コンサルタント株式会社へ委託する体制をとった。委託内容は、出土遺物の洗浄・注記・接合・実測・トレース等である。社会教育課担当者は、実測する遺物の選定を行なったほか、実測図及びトレースについては適宜確認を行い、受注者職員に指示等を行った。

このほか、第五回島津家墓所調査担当者会が垂水市市民館において開催され、文化庁・鹿児島県・姶良市・指宿市・鹿児島市・さつま町・垂水市の調査担当者が集まり、調査の現況、事業計画等について情報交換を行った。

このほか、文化庁山下調査官の現地視察があり、指定区域の確認、調査報告書

作成についての指導等があった。

当該年度における主な取り組みについては以下のとおりである。

平成三〇年六月～一一月　遺物実測（業務委託）
平成三〇年一一月一六日　空中写真撮影
平成三〇年一二月一〇日　鹿児島大学渡辺芳郎教授指導
平成三一年一月二四日～翌二五日　文化庁山下調査官現地視察及び整理指導
平成三〇年四月～三一年二月　第五回島津家墓所調査担当者会報告書作成

第二節　発掘調査の経過

（一）調査の目的と経過

垂水島津家墓所（以下、墓所）は、永禄四年（一五六一）国分市清水に創建され、慶長八年（一六〇三）に現在地に移された心翁寺跡に所在する。心翁寺跡は、伽藍が失われ、現在ではその様子について僅かな情報しか残されていない。発掘調査では、考古学的手法を用いて地下遺構の依存状況や形状を確認することで、心翁寺と墓所のありかたやその変遷を明らかにすることを目的とした。

第一次調査は平成二九年一月一八日～同年二月二七日までの実働一五日間、調査面積約二〇㎡、延べ作業員数三〇名である。第二次調査は、平成三〇年二月五日～二月二三日までの実働一〇日間、調査面積約八・二㎡、延べ作業員数一〇名である。

（二）発掘調査区の選定

第一次調査　前述したように、墓所は中央にある石階段により通じる上段部と下段部に分かれているため、それぞれに調査区を設けた。

まず始めに下段部に調査区を設けた（一トレンチ）。単純に作業効率を優先し、領主墓に近接する箇所で、ある程度発掘調査の面積が確保できる箇所という条件を満たす場所を選定した。その中から、領主墓の西北方向に、南北方向に伸びる用途不明の石造物が地表に露出している九代貴儔夫婦墓周辺に調査区を設定した。

次に、上段部に調査区を設けた（二トレンチ）。下段部と同様、領主墓に近接する箇所で、ある程度発掘調査の面積が確保できる箇所という条件を満たし、さらに、領主墓西南に、南北方向に伸びる用途不明の石造物が地表に露出している七代久治夫婦墓周辺に調査区を設定した。

第二次調査　下段部の北西、上段部との境近くに石幢（六面地蔵塔）が九基隣接して設置されている箇所がある。過去の現地指導等で、後世に移設された可能性が指摘されていたため、移設が行なわれたか否かを明らかにする目的で調査区を設けた（三トレンチ）。

前述した石幢群立に隣接して、一二代貴柄夫婦墓が設置されているが、石幢群と一二代貴柄夫婦墓碑の新旧関係及び移設の可能性について明らかにするべく、調査区を設けた（四トレンチ）。また、四トレンチの南、石造物が東西方向に設置されている部分に調査区を設けた（五トレンチ）。

第三節　発掘作業の経過

（一）発掘調査の組織

発掘調査の組織は、以下のとおりである。

調査主体　垂水市教育委員会
調査責任者　垂水市教育委員会
　教育長　長濱重光（平成二八年度）
　教育長　坂元裕人（平成二九年度、三〇年度）
調査企画担当者　垂水市教育委員会社会教育課
　課長　野嶋正人
調査事務担当者　垂水市教育委員会社会教育課
　文化スポーツ係主幹兼係長　福島哲朗（平成二八年度）
　文化スポーツ係兼開発推進係長　美坂康人（平成二九年度）

調査指導　文化庁文化財記念物課
　　文化財調査官　山下信一郎
　　鹿児島大学名誉教授　大木公彦
調査担当者　垂水市教育委員会社会教育課文化スポーツ係
　　副主幹　羽生文彦（平成二八・二九年度）
　　主事補　大瀬幸代（平成二八年度）
　　主事補　明石雄允（平成二九年度）
発掘作業員
【平成二八年度】小出光子、西尾衣久美
【平成二九年度】西尾衣久美

（二）発掘作業の経過―日誌抄―

第一次調査（平成二八年度）

一月一八日　環境整備。一トレンチ周辺地形測量。杭設定。レベル移動。垂水島津家九代貴儔夫墓墓南方にトレンチ設定（約三・二m×二・五m）。設定状況写真撮影。掘り下げ開始。

一月一九日　領主墓西北方向に直線的に配列する石造物の性格を明らかにする目的でサブトレンチ設定（約〇・七m×一・五m）。サブトレンチ掘り下げ。

一月二〇日　地業検出。トレンチ拡張（南方に約〇・五m×一・五m、東方（燈籠周辺）に約〇・七m×一・二m）。拡張部分掘り下げ。

一月二三日　地表約〇・二mで地山検出。トレンチ拡張（夫婦墓の埋設状況を確認する目的で基壇の周囲に約〇・五m幅のトレンチを設定）。拡張部分掘り下げ。サブトレンチと一トレンチが連結される。

一月二四日　近世遺物数点、土器一点出土。

一月二五日　二トレンチ周辺地形測量。杭設定。レベル移動。垂水島津家七代久治夫婦墓の正面に接するようトレンチ設定（約二・二m×一・一m）。設定状況写真撮影。掘り下げ開始。

一月二六日　二トレンチ拡張（トレンチ西方部分を約一・八m×〇・八m）。トレンチ西南に直線的に配列される石造物の性格を明らかにする目的でサブトレンチ（約〇・二m×九・五mと約〇・三m×四・六mの二箇所）を設定。

一月二七日　二トレンチ西方を約〇・五m拡張。サブトレンチと二トレンチが連結。

一月三〇日　一トレンチ完掘状況写真撮影。

二月一日　一トレンチ最終平面図作成。二トレンチより地業検出。

二月二日　一トレンチ断面図作成。

二月三日　二トレンチより近世遺物数点出土。

二月六日　一トレンチ埋め戻し。

二月七日　二トレンチ完掘状況写真撮影。

二月九日　二トレンチ最終平面図作成。

二月一〇日　二トレンチ断面図作成。

二月一二日　二トレンチ埋め戻し。機材撤収。調査終了。

第二次調査（平成二九年度）

二月五日　環境整備。三トレンチ周辺地形測量。杭設定。レベル移動。石幢集中部にトレンチ設定（約七・五m×〇・六mの方形を設定した後、中央二基の石幢に接するよう一・五m×一・〇mの方形に拡張して設定した）。設定状況写真撮影。掘り下げ開始。

二月六日　三トレンチ掘り下げ。石幢（石造物番号八四）基礎の下位より長辺が一〇cm～四〇cmの様々な大きさの礫が検出。

二月九日　近現代遺物数点。

二月一三日　平面上では把握できなかったが、土層堆積状況の観察より、上層との境界面がほぼ平坦になっている土層があることが判明。後世の造成面と判断した。

二月一四日　三トレンチ最終平面図作成。完掘状況写真撮影。

二月一六日　三トレンチ西、垂水島津家一二代貴柄夫婦墓の基壇南縁部に沿っ

てサブトレンチとして四トレンチ設定（二・〇m×〇・三m）。設定状況写真撮影。掘り下げ開始。

二月二〇日　四トレンチの南部に位置し、東西方向に伸びる石造物群の南縁部に沿ってサブトレンチとして五トレンチ設定（七・〇m×〇・二mの方形を設定した後、隣接する一一代貴品後室墓の西縁部に沿って、一・〇m×〇・二m拡張して設定）。設定状況写真撮影。掘り下げ開始。

二月二一日　四・五トレンチ最終平面図作成。完掘状況写真撮影。

二月二二日　三～五トレンチ断面図作成。

二月二三日　三～五トレンチ埋め戻し。機材撤収。調査終了。

第四節　整理等作業の経過

（一）報告書作製の組織

整理作業の組織は、以下のとおりである。

調査主体	垂水市教育委員会	
調査責任者	垂水市教育委員会	
	教育長	坂元裕人
調査企画担当者	垂水市教育委員会社会教育課	
	課長	野嶋正人
事務担当者	垂水市教育委員会社会教育課	
	文化スポーツ係長兼国体推進係長	大薗俊一
	文化スポーツ係長	小池康之
	社会教育係長	羽生文彦
報告書作成指導	文化庁文化財記念物課	
	文化財調査官	山下信一郎
	鹿児島大学名誉教授	渡辺芳郎
報告書作成担当者	垂水市教育委員会社会教育課	
	社会教育係長	羽生文彦
	作成補助	隈崎静花
	文化スポーツ係主査	北迫一信
	主事	福永幸代
	主事補	木脇翔

（二）整理作業の経過

平成三〇年六月～一一月	遺物実測委託業務
平成三〇年一一月一六日	空中写真撮影
平成三〇年一二月一〇日	鹿児島大学渡辺芳郎教授指導
平成三一年一月二四日～翌日二五日	文化庁山下調査官現地視察及び整理指導
平成三〇年四月～三一年二月	原稿作成

第二章　遺跡の位置と環境

第一節　地理的環境

（一）遺跡の位置

心翁寺跡は、垂水市田神字上ノ平添三二八―二に所在する。遺跡の中心部から鴨池・垂水フェリー垂水港ターミナルまでは西南方向に直線距離で約二km、鹿児島湾までは西方向に一・二kmほどの距離である。

世界測地系による遺跡の地理学的位置は、北緯三一度二九分二九秒、東経一三〇度四二分四〇秒であり、現在の標高は一一～一五mである。

現在の遺跡の範囲は約一八〇〇㎡を測る。遺跡は垂水島津家墓所の敷地になっている。垂水島津家墓所には、垂水島津家四代から一六代までの当主墓碑をはじめ多数の石造物が所在し、平成二〇年に垂水市の史跡に指定されている。

（二）周辺の地形・地質

垂水市の地形は、大きく三地域に分けることができる。東方の高隈山地を中心とする山地、その麓から鹿児島湾近くまで緩傾斜をなして広がるいわゆるシラス台地、そして台地間や海岸線にある沖積平野の三つである。シラス台地は、高隈山地と接する部分は海抜約二〇〇mであるが、西方ほど次第に低くなり、市街地付近では高さ一〇数mの断崖を連ね海岸に臨んでいる。

前述した山地帯は、白亜系の四万十累層群の高隈山帯（橋本、一九二六）に相当し、砂岩頁岩互層の高隈山層（太田・河内、一九六五）と牛根層（小川内・岩松、一九八六）の一部が第三紀中新生後期（一四Ｍａ）の高隈山花崗岩（柴田、一九七八）の貫入に伴い接触熱変成作用を受けホルンフェルス化している。

その山地から、浸食・運搬・堆積作用を受け扇状地状の垂水砂礫層を形成し、その上に旧期ローム層、大隅降下軽石層・妻屋火砕流堆積物・亀割坂角礫層・入戸火砕流堆積物・新期ローム層及びそれらの二次堆積物からなる、いわゆるシラス台地を構成している。

沖積層は砂や粘土、小石からなる。

心翁寺跡は、沖積平野が海岸線に出会う手前であり、標高約一〇m前後の微高地である。遺跡背後にはシラス台地から成る城山台地が控える。

引用・参考文献

太田良平一九五四「五万分の一地質図幅『垂水』および同説明書」　地質調査所

橋本勇一九六二「九州南部における時代未詳層群の総括」（『九大教養地学研報九一三―六九』）

小川内良人ほか一九八六「大隅半島四万十帯の地質構造」（『鹿大理学部紀要（地学・生物学）一九』）

柴田賢一九七八「西日本外帯における第三紀花崗岩貫入の同時性」（『地調月報二九　五五一―五五四』）

KOBAYASHI et al「Thickness and Grains-size Distribution of the Osumi pumice Fall Deposit from the Aira Caldrea」（Bull. Volcanol. Soc. Japan. 2 28 2129-139』1983）

荒巻重雄一九八三「姶良カルデラと入戸火砕流」（『月刊　地球vol. 5　2』）

山崎五十磨一九二九『鹿児島県史跡、名勝、天然記念物調査報告書第二輯（史蹟の部）』鹿児島県

宮原景敦一九五五「垂水町弥生期文化」『大隅第二号』大隅史談会

一九六四『鹿児島県遺跡地名表（鹿児島県文化財詞査報告書第十一集別冊）』鹿児島県教育委員会

一九七四垂水市教育委員会『垂水市史　上巻』

第二節　歴史的環境

（一）概要

本節では、心翁寺跡の歴史的環境について、古墳時代以前は周知の遺跡に基づき、概観することとする（図1）。古代以降については必ずしもこれに依らず、天保一四年（一八四三）刊行の『三国名勝図会』等の史料を用いて心翁寺跡周辺に所在した城郭・神社仏閣等を中心に概観することとする（図2）。

垂水においては、『三国名勝図会』以外に、往時の歴史を今日に伝える史料として次の三つが存在している。天明四年（一七八四）家老となった川上親賢の著（刊行年不詳）で、慶長一一年（一六〇六）の高帳による石高や惣廻のほか、城址や社寺の故事来歴等について記載されている『垂城伝誌』、川上親賢の子親昭により寛政八年（一七九六）刊行された、垂城伝誌より詳細に古城、社寺等について記載された『隅府温故集』、垂水島津家第九代貴儔の庶子末川周山の岳父にあたる肝付兼伯の著（刊行年不祥）で、元禄一二年（一六九九）の縄引や惣廻のほか、山川、古城、社寺について記載されている『垂城録』の三つである。この三つの史料も参考とした。また、刊行年は不祥だが垂水島津家の系統史である「垂水領主島津家家譜」も参考とした。

心翁寺跡の歴史については、次節にて述べることとする。

（二）弥生時代

垂水中央を東西に流れる本城川を挟んで、心翁寺跡より南西方向、シラス台地である上野台地の縁辺部に、中世の国人伊地知氏の支城の一つ岡崎城の城郭跡がある。その一帯に弥生時代の遺物散布地であるシオンモイ遺跡と水迫遺跡が所在する。また、心翁寺跡の南方、シラス台地城に位置する中世国人肥後氏の居城本城跡も弥生時代の遺物散布地として知られている。しかしながら、いずれの遺跡でも発掘調査は実施されておらず、詳細は不明である。

（三）古墳時代

中世の国人伊地知氏の支城である岡崎城の城郭跡とされる一帯に、古墳時代の遺物散布地である水迫頭遺跡が所在する。また、岡崎城の南方、上野台地上に古墳時代の遺物散布地である浜平遺跡が所在する。また、浜平遺跡の東方、上野台地上に古墳時代から古代にかけての遺物散布地である寺ノ平遺跡が所在する。また、心翁寺跡の北方、当時の仮屋の背後に控えるシラス台地（城山）上に、古墳時代の遺物散布地である俣江ヶ迫遺跡が所在する。しかしながら、いずれの遺跡でも発掘調査は実施されておらず、詳細は不明である。

（四）古代

下之宮鹿児島大明神　正確な建築年代は不明であるが、『垂城伝誌』によると、「往古上之宮手貫大明神御鎮座の節際上木大明神（新城の上木を改め神貫）と神軍これ有り候節開聞宮九社の内より御加勢の為御越し成られその節御鎮座故当所両廟御契約の由故実は知らず古棟札なし」とあり、さらに「此神軍の事開聞宮の神官等合戦加勢の事か古代神軍の事扶桑記に委く有り」とある。『隅府温故集』『垂城録』『三国名勝図会』ともにこの説を引いていることから、少なくとも江戸期には古代の創建と考えられていたようである。彦火々出見尊、豊玉彦命、玉依姫命、豊玉姫命、塩土老翁、猿田彦命を祭神とする。『垂城録』によると、「神領高拾石領主より寄附」とある。『三国名勝図会』に「社殿海濱にありて、松樹鬱茂す」とあるように鬱蒼とした鎮守の森に囲まれていたが、太平洋戦争の空襲により全焼。現在の建物は戦後再建されたものである。

（五）中世

心翁寺跡の北方、当時の仮屋の背後に控えるシラス台地（城山）上に、中世の遺物散布地である末木遺跡が所在する。しかしながら、発掘調査は実施されておらず、詳細は不明である。

本城跡　本城は垂水の有力国人伊地知氏の居城であった。『隅府温故集』によると「季豊系譜に曰下大隅下之城応永一九年甲午八月これを取る」とあり、三代

図１　心翁寺及び周辺遺跡地図

季豊の築城と考えられている。『垂城伝誌』によると「山城惣廻り拾壱町参拾弐間本丸惣廻り五拾間高さ壱町四拾間大手の口寅の方に有り浜端より城口迄拾弐町五拾弐間」とある。大永二年（一五二二）に伊地知七代重周が高城を奪い、八代重武は天文五年（一五二六）に下大隅垂水を知行、天文一三年（一五四四）に田上城を奪う等周辺の有力国人を下し垂水を治めたが、九代重興は永禄四年（一五六一）、祢寝氏や肝付氏と組んで島津氏（第一五代貴久）に叛いた。福山廻城の戦いや咲花平の戦い等数々の激戦を経たが、天正元年（一五七三）祢寝氏が島津に降伏し、翌天正二年（一五七四）牛根城が落ち伊地知氏も降伏した。降伏後は垂水、田上、高城、新城が召し上げられた。領地は分割され、高城・新城に鎌田氏、垂水城に川田氏、田上城に敷根氏などの地頭が置かれた。

（六）近世

林之城跡　垂水島津家四代久信により築城された。慶長八年（一六〇三）垂水島津家二代以久は佐土原を賜る。三代彰久は文禄二年（一五九三）、秀吉の朝鮮征伐（文禄の役）に従軍。従軍中の文禄四年（一五九五）に病に罹り巨済島で死去していたため、四代久信が大隅を譲られた。翌慶長九年（一六〇四）、久信は鹿屋から垂水の垂水城へ移る。慶長一六年（一六一一）、林之城（現垂水小学校）を築城し移った。慶長二〇年（一六一五）の一国一城令の発布以降は館または御仮屋と呼ばれ、垂水島津家の政庁として機能した。林之城の築城は垂水城が手狭になったためで、山林原野を切り開いて築城したことから林之城と呼ばれたとされる。林之城の様相について正確に記された資料は無いが、背後にシラス台地を控え、現在も城山の地名が残っていること、『隅府温故集』に、寛永一一年（一六三四）の屋敷町に中屋敷三八間～五二間、下屋敷一〇間～一三間との記述が見られることから、鹿児島城と同様、山城を本城として造り、詰城としたもので、これに屋形（居城）を加えた構成であったと考えられる。また、当時の遺構として、多聞櫓の一部と考えられる「お長屋」と呼ばれる建築物が残存している。

垂水五社　『隅府温故集』によると、上之宮手貫大明神、前述の下之宮鹿児島大明神、諏訪大明神、殿下大明神、新田大明神の五社が垂水五社として崇敬されていたとある。垂水領主であった垂水島津家も厚い信仰心を寄せていたと考えられることから、これら五社について記載する。

上之宮手貫大明神　正確な建築年代は不明であるが、『垂城伝誌』によると「往古京八幡より御鎮座と申し伝え候」とある。『隅府温故集』によると、もともと本城村楠木園にあったのを現在地の北方の岡の端に移したとあり、後世に現在地に移っている。下之宮鹿児島大明神の項で記したように、往古上木大明神と争った記録が残る。祭神は應神天皇、神后天皇、仁徳天皇、玉依姫の四座。『垂城録』に「神領高一〇石」とある。『隅府温故集』によると慶長六年（一六〇一）に垂水島津家二代以久が御息災延命を祈願した棟札を納めている。往時は流鏑馬が開催されていたことも記されている。また、「上之宮御下向の節守り上げ候人今川畑善良坊その子孫の由柊原に一人これ有り候」とあり、現在でもその故事に倣い上之宮手貫大明神の例祭には川畑家より依頼を受けた森山家が鮮魚等を奉納している。

下之宮鹿児島大明神　古代の項参照。

殿下大明神　永禄八年（一五六五）、垂水島津家二代以久が国分清水城に初代忠将の霊を崇めて建立する。祭神は愛宕、摩利支天、飯綱の三躰。寛永二年（一六二五）、垂水島津家四代久信が再興。『隅府温故集』に「一往市木村の内垂水城天下比良に御勧請と申し伝え候」とあり、「其後今の地に御建立の由」とある。「今の地」とは林之城の城山の中腹である。もともとは「天下大明神」であったものが、再興「殿下大明神」と記され、現在は「殿加神社」と表記される。『垂城録』に「神領高拾石」とある。また、殿下大明神社地に稲荷大明神（祭米五升）があったことも記されている。

新田神社　勧請年代は不明。『垂城録』に「元亀三年（一五七二）壬申一二月一日当郡主重武再興」とある。重武は本城を居城とした伊地知氏の八代である。また、『隅府温故集』には「久仍公（垂水島津家四代久信）御代再興これ有り」とある。また、龍伯様（太守一六代義久）が忠仍公（垂水島津家四代久信）を見舞いに来た際、五月雨が降り続き帰館が難しかったため歌を奉納したところ天気がすぐに回復したとの逸話も記されている。『垂城録』によると祭神は海童神。「神

図２　垂水市近世歴史地図

領高参石九斗」とある。

諏訪大明神（南方神社）　当時は蛸迫の諏訪平に上、下の二社あったとされる（『垂城録』に「仮屋元より辰巳の方一九町」とある）。いずれも勧請年代は不明であるが、『隅府温故集』には、御神体裏書に「文明一〇年（一四七八）戊戌三月廿八日大願主石井頭領源左衛門尉義仍と有り石井氏再興と相見得候」とある。石井氏は中世に垂水城を居城とした有力国人である。『三国名勝図会』には「義仍は、大岳公（太守九代忠国）の国老なり」とある。祭神は『三国名勝図会』によると建御方命、事代主命の二座。『垂城録』に「神領高拾石」とある。後世に鹿児島神社に合祀されたが、昭和三一年（一九五六）現在地に遷座。

成就院　如意山法智寺という。大乗院の末寺で、真言宗、本尊は不動明王。垂水島津家の祈願所である。『隅府温故集』によると、「忠仍公（垂水島津家四代久信）御代御祈願所にて高弐拾石成就院とこれ有り候只今の地へ引き直し候か不祥」とあるが、『垂城伝誌』『三国名勝図会』では久信が鹿屋に創建、後垂水へ移すとされている。また、鹿屋の普請は伊集院幸侃（忠棟）の家作とされる。開山は賢光上人。『隅府温故集』によると元和九（一六二三）年には高五拾石であったが、万治元年（一六五八）の検地より高四拾九石に減ったとある。敷地内に永吉坊（市木村永吉門から移転。高八石壱斗八升）、感應寺（新城寛明寺（新城島津家の香火所）の東方から移転。高八石弐斗参合壱勺弐才）、保寿院（高城村神の薗門より移転。高八石弐斗四合壱勺七才）、松元寺（高八石壱斗九升弐合七勺壱才）、多宝院（高八石壱斗八升弐合弐勺九才）、普門院（高八石壱斗八升参合七勺五才）の六つの支坊があった。廃仏毀釈により廃寺となったが、現在でも成就院周辺には「門前」の呼称が残っている。

華厳寺　妙法山華厳寺という。京都本能寺と摂州尼崎本興寺両寺の末寺で、法華宗、本尊は釈迦如来と多宝如来の両尊。本是院（垂水島津家七代久治の室月清院の母。宗家一九代光久側室）の菩提のため、垂水島津家八代忠直（太守綱貴三男）が綱貴の命により元禄一四年（一七〇一）に建立。ただし、墓は正顕寺にあり、華厳寺には御塔婆のみ安置されていた。開山は伝良院日殊。『垂城伝誌』によると「高城村破壊寺花厳寺御建立」とあり、もともとあった廃寺を再興したとされる。『隅府温故集』によると高三拾石余。廃仏毀釈により明治六年（一八七三）廃寺。かつて寺地が俗に本住坊と呼ばれていたことから、現在でも寺の通りを「本住坊通」とする呼称が残っている。戦後、寺跡に養老院「華厳園養老院」が出来た（現在は移転）。

文行館　安永二年（一七七三）に設置された藩校造士館に遅れること三年、垂水島津家一〇代貴澄が設置した学問所である。現在の垂水高校の西に位置する。讃州の儒者乾徽猷を学頭とし、家老市川鶴鳴に経営を任せた。鹿児島から向井友章、黒田為国の二人の学者を招き、市木源右衛門、伊地知小十郎の二人の学者を講師とし、四書五経を主に史書などが教授されていた。明治維新までの約百年間存続し、士家の子弟が学問を学び、多くの文化人を輩出した。

第三節　垂水島津家と心翁寺

（一）垂水島津家と垂水

戦国時代、垂水でも垂水城を居城とした石井氏、本城を居城とした伊地知氏、高城を居城とした肥後氏、田上城を居城とした梶原氏ら有力国人による覇権争いがあった。大永二（一五二二）年、伊地知七代重周が肥後氏を退け高城を奪う。天文五（一五二六）年には伊地知八代重武が石井氏を滅ぼし、下大隅を知行。天文一三（一五四四）年には重武が梶原氏を滅ぼし、田上城を奪う。このように伊地知氏が垂水での覇権を掌握した。

永禄四（一五六一）年、伊地知九代重興は祢寝氏とともに肝付氏と結んで島津氏との争いを起こした。福山廻城の戦いや咲花平の戦い等数々の激戦を経たが、天正元（一五七三）年祢寝氏が島津に降伏し、翌天正二（一五七四）年牛根城が落ち、伊地知氏も降伏した。降伏後は垂水、田上、高城、新城が召し上げられた。領地は分割され、高城・新城に鎌田出水守正近、垂水城に川田駿河守義朗氏、田上城に敷根頼賀などの地頭が置かれた。

慶長四（一五九九）年、垂水島津家二代以久が下大隅の領主となり、地頭は廃止されることとなった。

慶長八（一六〇三）年、以久は島津豊久の戦死により公領となっていた佐土原三万石の地を拝領し大名に任ぜられた。以久は佐土原に移り、孫の垂水島津家四代久信に垂水を譲った。久信は垂水城が手狭になったため、慶長一六年（一六一一）年、林之城に移る。以降明治維新まで約二六〇年間、垂水は垂水島津家の支配下に置かれることとなる。

初代忠将　永正一七年（一五二〇）、伊作家十代（相州家三代）忠良次男、宗家一五代貴久の次弟として伊作城（亀丸城）に生まれる。母は島津薩摩守重久娘。大永六年（一五二六）元服。享禄二年（一五二九）、父忠良の山田城攻めに従軍し初陣を飾る。天文二年（一五三三）から一六年（一五四七）までの間、父忠良に従い、兄貴久とともに戦功をあげ、伊作島津の基礎を固めた。天文一七年（一五四八）、大隅国清水の城代本田薫親と左京親兼を攻め、城を落とす。この軍功により忠将は清水城を与えられ、清水、国分、姫城、松永、上井、浜之市、小村、湊、小川、廻、市成、恒吉あわせて一三箇所一万八千石の領主となる。清水城在住の間、本田氏が崇拝していた楞厳寺に帰依し、熱心な門徒となる。天文二三年（一五五四）の大隅国岩剣城の合戦以降、大隅・日向への勢力拡大を図り、渋谷氏や肝付氏との抗争を続けた兄貴久を助け、大いに戦功を上げた。永禄四年（一五六一）、楞厳寺の近澤守悦禅師より道号「心翁大安居士」を授けられる。この年、肝付氏に奪われた福山廻城を奪回するため自ら出陣、討ち死にする。

二代以久　天文一九年（一五五〇）、忠将長男として国分清水城に生まれる。母は佐多上野守忠成娘。永禄四年（一五六一）、父忠将菩提のため清水楞厳寺の境内に心翁院を築き、塔頭とする。また、永禄八年（一五六五）にはやはり忠将の霊を崇めるため清水城に天下神を建立。同年八月に宗家一六代義久に隅州帖佐郷の知行を命ぜられる。太守義久が大隅・日向への勢力拡大を図った際には従軍し、天正元年（一五七三）の肝付氏攻め、天正四年（一五七六）の高原攻め、天正五年（一五七七）の佐土原攻めに加わり、島津の三州統一に尽力。天正三年（一五七五）には忠将の供養塔を福山廻城の傍に建立し大安寺を建立している。天正五年（一五七七）、豊後の大友宗麟の侵攻に対し出陣した義久に従軍。義久の弟家久が肥前進出した際は従い、天正一二年（一五八四）の沖田畷の戦いにも加わっている（龍造寺隆信戦死）。天正一五年（一五八七）、黒田孝高との目白坂の戦にも従軍。義久が川内泰平寺で豊臣秀吉に降伏した際は垂水島津家三代実子彰久を人質として差し出している。天正一六年(一五八八)、以久は清水を嫡子彰久に譲り、国分上井城へ移る。文禄元年（一五九二）、秀吉の朝鮮出兵に従い朝鮮へ渡る。翌文禄二年に帰国。文禄四年（一五九五）、秀吉の検地が行われ、以久は種子島、永良部島、屋久島の三島一万石を知行するよう朱印を賜る。同年彰久が朝鮮で病に倒れたため、遺体を持ち帰り楞厳寺に葬る。このとき彰久の法諡から二字をとり、心翁院を天宗寺と改め、宝厳山（忠将室の法名）とした。慶長二年（一五九七）種子島へ移る。このとき天宗寺を種子島の内ノ池田に移す。慶長四年（一五九九）、宗家一八代家久から大隅垂水一万一六八七石を賜り、垂水城（元垂水）へ移る。同年、宝厳山天宗寺を垂水へ移す。同年、伊集院忠真が起こした庄内の乱鎮圧に尽力。慶長八年(一六〇三)、以久は佐土原三万石の領主となるよう命ぜられ、大隅垂水を孫の久信に譲る。慶長一五年（一六一〇）、伏見（京都）で没。

三代彰久　永禄一〇年（一五六七）、以久長男として国分清水城に生まれる。母は北郷左ヱ門時久の娘。天正一二年（一五八四）、父以久とともに沖田畷の戦いに加わる。天正一五年（一五八七）、秀吉の九州征伐の際は父以久より人質として差し出される。文禄二年（一五九三）、秀吉の朝鮮出兵の命に従い朝鮮へ。朝鮮の逸話として彰久家臣安田次郎兵ヱ義次の虎退治が伝わっている。文禄四年（一五九五）病に罹り巨済島で没。

四代久信　天正一三年（一五八五）、彰久の長男として国分清水城に生まれる。母は宗家十八代義久の二女。文禄四年（一五九五）、鹿屋・大姶良八千石を賜る。慶長二年（一五九七）、伊集院忠棟が都城移封後に鹿屋城へ入城。同年人質となり江戸へ。慶長五年（一六〇〇）、佐土原城代家久の娘を娶る。慶長七年（一六〇二）再び人質となり江戸へ。慶長九年（一六〇四）、三度江戸へ。また、前年慶長八年（一六〇三）に垂水島津家二代以久が佐土原を賜ったことから大隅を譲られていたが、この年に鹿屋から垂水へ移った（鹿屋兼領）。慶長一五年（一六一〇）、以久が没するが、宗家一七代義久が病床にあること、母も老年であることを理由に佐土原領主を固辞したとされる。慶長一六年（一六一一）、垂水城が手狭になった

ため山林原野を切り開き、林之城（現垂水小学校）を築城、移る。元和二年（一六一六）、家督を久敏に譲り、鹿屋へ隠居。寛永二年（一六二五）、天下大明神を再興。寛永一四年（一六三七）鹿屋で没。安養寺に葬られた。

五代久敏　慶長七年（一六〇二）、久信の長男として鹿屋城に生まれる。母は島津中務大輔家久の娘。慶長一四年（一六〇九）人質となり京都伏見に行き、同一八年（一六一三）帰国。元和二年（一六一六）、家督を継ぐ。元和三年（一六一七）再び人質となり江戸に行き、同六（一六二〇）年帰国。その後元和九年（一六二三）年江戸へ。寛永元年（一六二四）年、江戸で瘴癘に罹患、そのまま病没。吉祥寺に葬られた。

六代忠紀　宗家一八代家久の七男として元和八年（一六二二）生まれる。母は島津備前忠清の娘。寛永元年（一六二四）、垂水島津家五代久敏が病没。久敏には男子が無かったため、宗家一八代家久の三男久貞が垂水島津家に入った。寛永八年（一六三一）、家久が将軍家光に拝謁する際忠紀も同行。玄蕃頭に任ぜられ、従五位下に叙任。寛永一一年（一六三四）、久貞が都城領主北郷氏の養子となったため、忠紀が垂水島津家の家督を継いだ。寛永一三年（一六三六）、垂水に入る。同年石之窪に牧神を再興。寛永一五年（一六三八）、島原の乱鎮圧のため出兵するも、出水で待機中に帰陣の命を受け帰垂。寛永二〇年（一六四三）、久重と改名。正保三年（一六四六）江戸に発ち、そのまま翌正保四年江戸で没。廣岳院に葬られたが遺骨は垂水へ帰され、節心寺に葬られた。

七代久治　忠紀の長男として正保二年（一六四五）に生まれる。母は桂山城守忠能の娘。正保四年（一六四七）、忠紀の死後家督を継いだ。慶安三年（一六五〇）、夜半に大火あり、仮屋も兵具蔵と銀蔵を残して消失したとされる。承応三年（一六五四）、元服。美作を号し、久憲と改名する。延宝五年（一六七七）には台風が垂水を襲い、二代以久が建立した初代忠将の供養塔が倒壊したため、久治はこれを再興した。延宝七年（一六七九）、節心寺を心翁寺と改めた。このとき大安寺に二〇石、楞厳寺に一〇石を寄付し祖先の菩提を弔い、忠将から久治までの系図を、大安寺、楞厳寺、心翁寺に納めたとされる。延宝九年（一六八一）、忠将、以久、久信の神主を心翁寺に置く。貞享元年（一六八四）、玄蕃と改称する。元禄二年（一六八九）、跡継ぎがいなかった久治は、宗家二〇代綱貴の三男虎安丸（忠直）を養子とした。元禄三（一六九〇）年、時を告げるための鐘楼を垂水に設置。元禄四年（一六九一）、宗家二〇代綱貴に従い江戸に行き、将軍綱吉と謁見。翌元禄五年（一六九二）、帰途の途中の京都伏見で重病に罹り、そのまま死去、月橋院に葬られた。遺骨は垂水へ帰され、心翁寺に葬られた。正確な時代は不明であるが、元禄年間、すなわち久治の治世下に新田開発が行なわれたと考えられている。これにより整備されたのがよめじょ川用水であり、整備事業は寛保元年（一七四一）まで続いた。現在も水之上地区に広がる水田を潤している。

八代忠直　宗家二〇代綱貴の三男として貞享五年（一六八八）に江戸で生まれた。母は江田五兵衛国重入道道用の娘。元禄二年（一六八九）年に久治の養子となる。元禄六年（一六九三）年垂水に入る。元禄一〇年（一六九七）元服。又四郎と称する。元禄一四年（一七〇一）、玄蕃と称する。この年七代久治の室月清院の母であり宗家一九代光久の側室である本是院の菩提のため、綱貴の命により華厳寺を建立する。宝永二年（一七〇五）、綱貴の遺髪を高野山奥の院に納めている。宝永五年（一七〇八）宗家二一代吉貴に従い江戸へ行き、将軍綱吉と謁見。正徳元年（一七一一）病に倒れたが、長子安千代丸は夭折しており後継者がいなかったため嗣を願い出、宗家二一代吉貴の二男小源太（貴儔）が養子となった。同年忠直は病没、心翁寺へ葬られた。なお、遺髪は正徳三年（一七一三）に垂水島津家九代貴儔の命により高野山に納められている。

九代貴儔　宗家二一代吉貴の二男として、宝永五年（一七〇八）に生まれた。母は名越右膳恒渡の妹。幼名小源太。正徳元年（一七一一）、忠直が病に倒れたため垂水島津家の養子となる。それまで小源太が末川氏を称していたことから、以降垂水島津家の庶子は末川姓を名乗る命を受ける。正徳二年（一七一二）、四代久信が庶子である新城島津家初代久章に分与した土地や、公領となった土地について旧領に復するよう幕府に願い出、一万八千石を領することが許されている。正徳三年（一七一三）、藩主より嫡男及び二男は「久」の字を、三男以降「将」の字を諱とするよう命ぜられる。正徳六年（一七一六）、吉貴邸にて元服。久典と改名し、玄蕃を称する。この年垂水に入っている。享保九年（一七二四）、当時鹿屋郷

に属していた柊原と上名、大姶良に属していた野里村を領地として賜る。享保二〇年（一七三五）、桜島地頭職に補される。元文元年（一七三六）、出水地頭職に補される（桜島地頭兼任）。元文二年（一七三七）、吉貴の諱を賜り、名を貴儔と改めるが、このとき子孫に代々「貴」の諱をつけることを願い出、許されたため、以降の垂水島津家当主は皆「貴」の諱を用いることになる。元文三年（一七三八）、垂水家、重富家、加治木家が一門家と定められる（延享元年（一七四四）に今和泉家が再興、これに加わる）。寛保元年（一七四一）、桜島地頭を辞す。また、元禄年間より続いたよめじょ川の疎水工事が終了。新御堂の新田が開拓された。延享二年（一七四五）、備中と改称。宝暦一一年（一七六一）、出水志布志地頭を命じられる。また、この年に宗家二五代重豪に銃術を指南している。宝暦五年（一七五五）、備前と改称。宝暦一二年（一七六二）、伊集院、大根占の地頭職に補される。安永四年（一七七五）、家督を垂水島津家一〇代貴澄へ譲り、剃髪して静山と称する。寛政三年（一七九一）垂水で没。心翁寺に葬られた。なお、遺髪は垂水島津家一〇代貴澄により高野山に納められている。現在の垂水の商店街の基礎を築いたのは貴儔と言われている。夫人は忠直の娘である。貴儔の長女（都美）は、寛保三年（一七四三）、加治木家二四代久門に嫁ぎ、延享二年（一七四五）、男児を出産するが、都美はその日のうちに没。久門は四年後の寛延二年（一七四九）、兄である宗家二三代宗信が亡くなったため宗家二四代を継ぎ（重年）、重年没後は久門と都美の子が二五代重豪となる。重豪が母の三十三回忌に築いた供養塔は亀墓と呼ばれている。三女銀は種子島蔵人久房に嫁ぎ、後に大帰。天明四年（一七八四）没し、華厳寺に葬られた。垂水島津家墓所内に一際巨大で壮麗な墓碑（廟）が遺されている。

一〇代貴澄　宗家第二一代吉貴公の五男として、元文三年（一七三八）に生まれた。母は郷田仲兵衛兼親の女。貴儔の長男鍋十郎、二男清五郎は夭折していたため、誕生の翌日に貴儔の養子となり、小源太の名を賜う。延享二年（一七四五）元服。貴澄を名乗り、玄蕃と称する。宝暦元年（一七五一）、垂水に入る。宝暦一四年（一七六四）将軍家治と謁見。鹿児島への帰路、各地を視察し、風流の心を養い、民風を学んだと言われている。安永四年（一七七五）、家督を継ぎ、備前と改称す。安永五年（一七七六）、藩校「造士館」に次ぐ郷校となる学問所「文行館」を創設する。安永八年（一七七九）、桜島大噴火。おびただしい人馬が焼け出され、垂水へ逃れようと海に飛び込む者も多かったと言う。貴澄は飛び込んだ人馬の救出にあたったが、溺死するものも数多かった。貴澄はこれらの溺死者や焼死者の霊を弔うために、心翁寺の道国泰憲禅師に海渇の浜で大供養を行わせ、石碑「櫻島焼亡塔」を松岳寺に建立した。碑文は当時家老であり文行館経営者でもあった市川鶴鳴。碑文は破損や風化によって一部判明しない部分もあるが、碑文の内容は飛鳥井雅光卿門下の伊地知季虔が垂水島津家一三代貴典の命により天保九年（一八三八）に記した「櫻島燃記」中にも記されており、死者一七四名とある。この桜島爆発以降、復興とそれに伴う財政対策、領内の民政に努め、特に学問を奨励した。本藩から儒学者の向井友章や黒田為国らを招き、文行館の経営に讃岐丸亀の儒学者乾徽猷や上州高崎の儒学者市川鶴鳴らを登用した。当時の垂水の文学熱は県内でも一目置かれたものであったらしく、多数の和歌集や漢詩集らがこの時代に編纂されている。天明六年（一七八六）、越後と改称。翌天明七年（一七八六）、宗家二六代斉宣の継統を祝い家臣町田次郎兵衛実員を江戸に遣わす。この年備前と改称。寛政七年（一七九五）、美作と改称。貴澄の男子は夭折していたため、享和三年（一八〇三）、家督を娘の婿である十一代貴品に譲った後、蛸の迫に種玉亭という庵を結び、元直と改称し豫章と号し、風流の中晩年を過ごしたと言われている。文化四年（一八〇七）没。心翁寺へ葬られた。なお、遺髪は文化五年（一八〇八）に一一代貴品により高野山奥の院に納められている。

一一代貴品　日置城主島津佐衛門久寧の長男として宝暦七年（一七五七）に生まれた。母は貴儔の娘。初名は久典。安永三年（一七七四）、貴澄の女と結婚し、垂水島津家の婿養子となる。婚姻を機に貴品を名乗り、又四郎と称す。宗家二五代重豪に謁見し、垂水島津家の養子となったことについて謝意を述べる。天明元年（一七八一）、玄蕃と称する。享和三年（一八〇三）家督を継ぐ。文化二年（一八〇五）、長門と改称。宗家二六代斉宣に謁見、自身の嗣続について謝意を述べる。文化七年（一八一〇）、公儀天文方であった伊能忠敬が沿岸測量のため来垂。文化一三年（一八一六）没。心翁寺へ葬られた。

一二代貴柄　貴品の長男として寛政三年（一七九一）生まれる。母は島津図書久亮の娘（貴品の後室）。初名貴明。小字小源太。同年、宗家二六代斉宣から冠を授かり元服。又四郎の名を賜る。享和三年（一八〇三）廉四郎と改称。文化二年（一八〇五）、玄蕃と改称。文化九年（一八一二）、美作と改称。文化一三年（一八一六）貴品の死後家督を継ぐ。文化一四年（一八一七）、斉宣が領内巡検の際、来垂。翌一五年に宗家二七代斉興に謁見、家督相続について謝意を述べる。文化一六年（一八一九）、大炊と改称。天保二年（一八三一）、重豪が従三位の位を賜ったことを祝い家臣町田源五右衛門実凭を江戸に遣わす。この年隠居、静水と号す。天保四年（一八三三）没。心翁寺へ葬られた。

一三代貴典　貴柄の二男として文化七年（一八一〇）生まれる。母は島津周防忠救の娘。幼名小源太。文化一五年（一八一八）宗家二七代斉興から冠を授かり元服。又四郎の名を賜る。文政四年（一八二一）讃岐と改称。天保二年（一八三一）、長男謙次郎が夭折していたため家督を継ぐ。斉興に謁見、家督相続について謝意を述べる。天保一〇年（一八三九）、斉興が宰相の位を賜ったことを祝い家臣安山三左ヱ門親敬を江戸に遣わす。天保一二年（一八四一）、斉宣が正四位の位を賜ったことを祝い家臣川上六郎兵ヱ親暁を江戸に遣わす。弘化五年（一八四八）、領内巡検の斉興を垂水で迎える。嘉永六年（一八五三）、大隅日向巡検の宗家二八代斉彬を垂水で迎える。安政三年（一八五六）、足疾により隠居、翌四年栖山と号す。元治二年（一八六五）没。心翁寺へ葬られた。

一四代貴敦　貴典の長男として天保三年（一八三二）生まれる。母は島津山城守忠寛の女。幼名小源太。天保一〇年（一八三九）、宗家二七代斉興から冠を授かり元服。又四郎の名を賜る。天保一一年（一八四〇）、奥州八戸藩主である南部遠江守信順（重豪の一四男）の娘、八百姫を娶る。安政三年（一八五六）家督を継ぐ。翌安政四年（一八五七）、讃岐と改称。宗家二八代斉彬に謁見、家督相続について謝意を述べる。この年仮屋炎上。翌五年公明により江戸へ。翌安政六年（一八五九）宗家二九代忠義が従四位・左近衛少将に叙任した際に同行、一四代将軍家茂に謁見。慶応四年（一八六八）から始まる戊辰戦争に際しては、垂水から二回、計一七二名を派兵。大阪警護等後方支援に当たっており、莫大な軍資金が拠出されている。明治二年（一八六九）、土地を返上し、士族となる。改めて家禄一五〇〇石を賜る。明治九年（一八七六）、家督を長男貴徳にゆずり、亀遊と改称。明治一〇年（一八七七）の西南戦争に際しては、垂水から六一〇名が従軍している。明治二三年（一八九〇）没。心翁寺へ葬られた。

新城島津家　垂水島津家三代彰久の室は、宗家一七代義久の娘であり、婚姻に際し化粧領として新城等三千七百石を与えられた。彰久の死後、寛永四（一六二七）年に新城に隠居。その後、新城と呼ばれるようになる。新城の子垂水島津家四代久信には、垂水島津家五代となる久敏の他に庶子久章がいた。久章の室は宗家十八代家久の娘であるが、婚姻に際し化粧領として一千石を与えられたので、祖母である新城から譲り受けた三千七百石と合わせ、四千七百石をもって寛永十三年（一六三六）に新城島津家を創設した。寛永一七年（一六四〇）、久章は江戸で将軍家への挨拶を行うが、その帰路に突然出奔。その後身柄を確保されるが、このことを咎められ、帰国させられる。帰国後は川辺の宝福寺に預けられた後、谷山の清泉寺に移される。正保二年（一六四五）、久章は一連の騒動の責任を取らされる形で藩命により討手を差し向けられ、最後は清泉寺で自決。後新城島津家は断絶となる。久章の子忠清は、新城島津家が断絶したため忠紀の弟として垂水島津家に入る。忠清は承応二年（一六五三）、姓を末川と改め新城島津家を再興、新城島津家二代目となった。その後明治二年（一八六九）、新城島津家一三代久治が私領を奉還し、鹿児島に転居した。

（二）垂水島津家の菩提所

心翁寺跡には歴代の垂水島津家当主の墓碑があるが、全ての当主の菩提所が一貫して心翁寺であったわけではない（図4・表2）。

本項では、心翁寺以外の垂水島津家歴代当主の菩提所について、前項でもあげた天明四年（一七八四）家老となった川上親賢著『垂城伝誌』（刊行年不詳）、寛政八年（一七九六）刊行の『隅府温故集』、第九代貴儔の庶子末川周山の岳父にあたる肝付兼伯の著『垂城録』（刊行年不祥）、垂水島津家の系統史である『垂水領主島津家家譜』（刊行年不祥）、天保一四年（一八四三）刊行の『三国名勝図会』

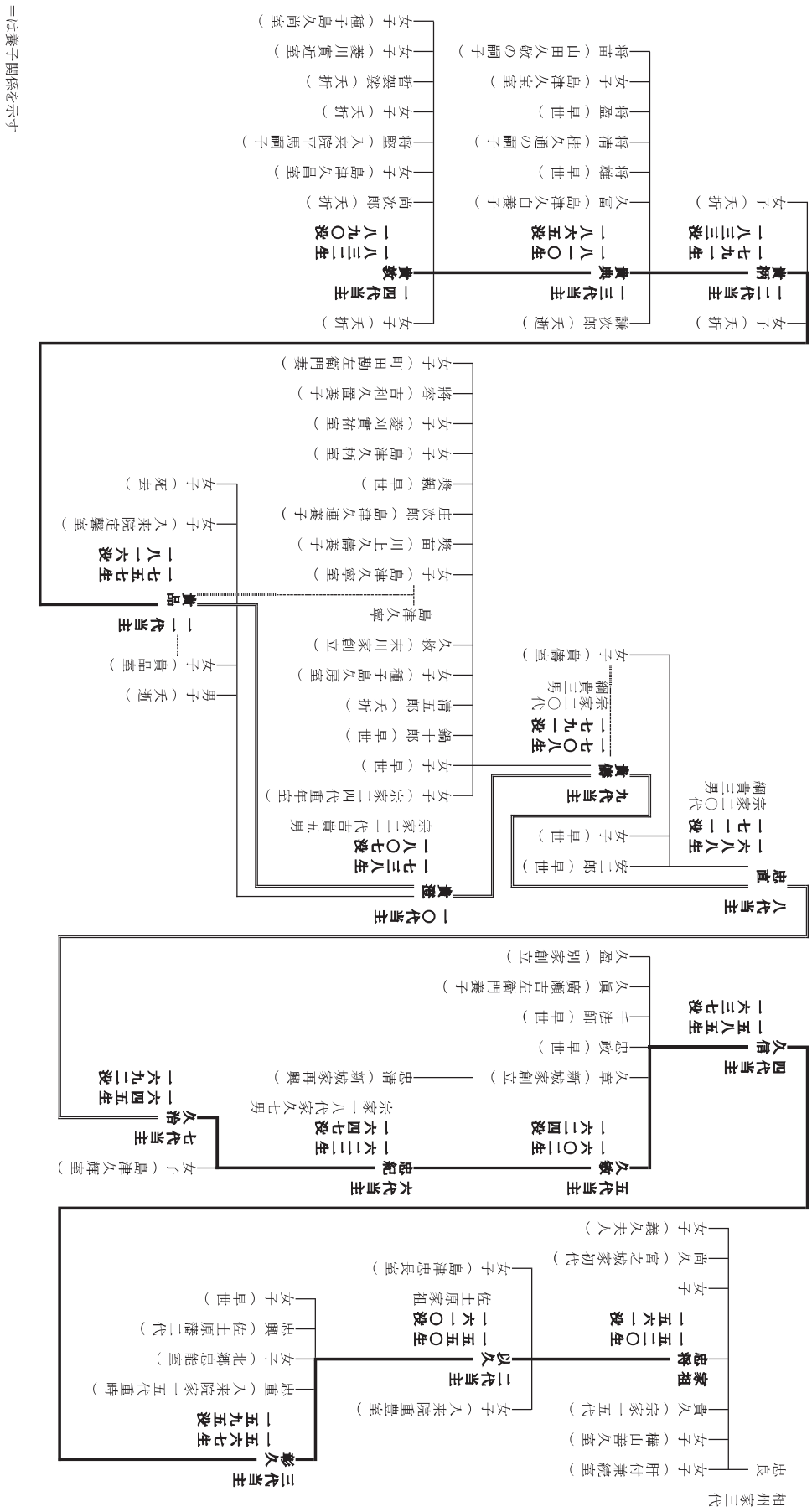
=は養子関係を示す
相州家三代
忠良
女子（肝付兼続室）
女子（椎山曹久室）
貴久（宗家一五代）
忠家将軍
一五二〇生
一五八二没
尚久（宮之城家初代）
女子（義久夫人）
女子（入来院重豊室）
二代当主
以久
一五五〇生
一六一〇没
佐土原家祖
女子（島津忠良室）
三代当主
彰久
一五六七生
一五九五没
忠重（入来院家一五代重時）
女子（北郷忠能室）
忠興（佐土原藩二代）
女子（早世）
四代当主
久信
一五八五生
一六三七没
千法師（早世）
忠政（早世）
久章（新城家創立）
忠清（新城家再興）
宗家一八代家久七男
一六四五生
一六九二没
久盈（別家創立）
久良（廣瀬吉左衛門養子）
五代当主
久教
一六〇〇生
一六四二没
六代当主
忠紀
一六四二生
一六九二没
女子（島津久輝室）
七代当主
久治
一六四五生
一六九二没
八代当主
忠直
一六八八生
一七三八没
安二郎（早世）
女子（早世）
九代当主
綱貴
宗家二〇代
一七〇八生
一七三八没
女子（貴藤室）
女子（綱宗家二〇代貴三男）
一〇代当主
貴逸
一七三八生
一八〇七没
宗家二一代吉貴五男
女子（宗家二四代重生室）
女子
女子（早世）
鍋十郎（早世）
清五郎（天折）
女子
久教（末川家創立）
女子（種子島久房室）
女子（貴品室）
男子（天逝）
一一代当主
貴品
一七五七生
一八一六没
女子（入来院定馨室）
女子（死去）
島津久寧
女子（島津久榊室）
女子
女子（菱刈實祐室）
將谷（吉利久置養子）
女子（町田勘左衛門妻）
女子
嫡男（早世）
庄次郎（島津久連養子）
嫡男（川上久儔養子）
女子（島津久愛室）
一二代当主
貴久
一七〇九生
一七六八没
女子（入来院重豊室）
女子（宗家二五代貴久室）
貴久（宗家二五代）
一三代当主
謙次郎（天逝）
女子（天折）
一四代当主
貴久
一八一〇生
一八六〇没
久富（島津久白養子）
將雄（早世）
女子（島津久昌室）
尚次郎（天折）
一五代当主
貴久
一八二〇生
一八九〇没
將盈（桂久通の嗣子）
將清（桂久通の嗣子）
女子（早世）
將堅（入来院平馬嗣子）
女子（天折）
將盈（早世）
女子（島津久宝室）
將苗（山田久敬の嗣子）
女子（菱川實近室）
女子（種子島久尚室）
將盈（菱川實祐養子）
女子（天折）
女子（天折）
一六代当主
貴久
一七九一生
一八三九没
女子（天折）
女子（天折）

図３　垂水島津家略系図

表１　垂水島津家歴代当主一覧

代	諱	生年	相続	隠居	没年	享年	最高官位・官職	号	生地	没地
1	ただまさ 忠将	永正17 1520	—	—	永禄4 1561	42	右馬頭		薩摩国 伊作亀丸城	大隅国 福山廻城
2	ゆきひさ 以久	天文19 1550	—	慶長8 1603	慶長15 1610	61			大隅国 国分清水城	山城国 伏見
3	てるひさ 彰久	永禄10 1567	—	—	文禄4 1595	29			大隅国 国分清水城	朝鮮国 巨済島
4	ひさのぶ 久信	天正13 1585	慶長8 1603	元和2 1616	寛永14 1637	53			大隅国 国分清水城	大隅国 鹿屋
5	ひさとし 久敏	慶長7 1602	元和2 1616	—	寛永元 1624	23	相模守		大隅国 鹿屋城	江戸
6	ただのり 忠紀	元和8 1622	寛永11 1634	—	正保4 1647	26	従五位下 寛永8（1631） 玄蕃頭　越後守		鹿児島？	江戸
7	ひさはる 久治	正保2 1645	正保4 1647	—	元禄5 1692	48			鹿児島？	山城国 伏見
8	ただなお 忠直	貞享5 1688	元禄5 1692	—	正徳元 1711	24			江戸	垂水？
9	たかとも 貴儔	宝永5 1708	正徳元 1711	安永4 1775	寛政3 1791	84		静山	鹿児島？	大隅国 垂水
10	たかすみ 貴澄	元文3 1738	安永4 1775	享和3 1803	文化4 1807	70		豫章	鹿児島？	大隅国 垂水
11	たかしな 貴品	宝暦7 1757	享和3 1803	—	文化13 1816	60		栢梁？	鹿児島？	垂水？
12	たかもと 貴柄	寛政3 1791	文化13 1816	天保2 1831	天保4 1833	43		静水	鹿児島？	垂水？
13	たかのり 貴典	文化7 1810	天保2 1831	安政3 1856	元治2 1865	56		栖山	鹿児島？	大隅国 垂水
14	たかあつ 貴敦	天保3 1832	安政3 1856	明治9 1876	明治23 1890	59		亀遊	鹿児島？	垂水？

などをもとに概観する。

なお、菩提所とは葬送と亡魂供養が行なわれた場所を示すが、これらの内容を知ることができる資料は殆どない。また、葬儀の場所と葬地が同一であるとは限らない。以下ではこれらを踏まえ、基本とした文献に「石塔」や「御墓」等何らかの「墓」があると示された寺院や、「墓」についての記録はないが、「菩提所」と記されているものも記録した。

楞厳寺　楞厳寺は、大隅国国分清水にあり越前国宅良慈眼寺の末寺で仏頂山と号した。曹洞宗の寺院で、応永二〇年（一四一三）、天真自性和尚が惣勝寺として開基。二世機堂和尚が楞厳寺と改めた。天文一七年（一五四八）、初代忠将が本田薫親を追放した後、忠将の采邑となった。初代忠将、三代彰久の墓碑があったとされるが空襲により焼失している。『垂水島津御家傳記』に、「寺中ノ東は忠将公、西ハ彰久公ノ御灰塚也。」とある。『隅府温故集』に「五輪の石塔弐これ有り候」とある。彰久が没した際殉死した家臣安田次郎兵衛と浜川糸右衛門のものと考えられている。『垂城録』に「永禄四年（一五六一）清水に於て右馬頭忠将主菩提の為に楞厳寺の境内に一宇を建立し心翁院と唱え申し候。其の後文禄年中改めて心翁院天宗寺と号し」とある。楞厳寺の敷地内に建立された建物が後の心翁寺に繋がって行く建物で、初代忠将の法諡から二字を取って心翁院と名付けられた。その後三代彰久の法諡から二字を取り天宗寺と改められている。二代以久が種子島へ移った慶長二年（一五九七）、天宗寺も種子島の内ノ池田に移される。その後以久が垂水へ移った慶長四年（一五九九）、天宗寺も垂水へ移される。

大安寺　大安寺は、福山麓にあり太平山と号した。天正三年（一五七五）、二代以久が初代忠将の供養のため建立した。『隅府温故集』に「以前は楞厳寺餉下にて候処近代口事これ有りその後関東の餉下に相成る」とある。寛政三年（一七九一）一二月晦日に大火で焼失した。

大雲院　大雲院は、京都にあり龍池山と号した。浄土宗の寺院である。天正一五年（一五八七）、織田信長の長男信忠の菩提を弔うため、信忠が討たれた二条御所跡に創建。貞安和尚の開山で、信忠の法名から名づけられたとされる。同年中に豊臣秀吉の命により四条寺町へ移転。その後度々火災により消失し、明治初期に再建されたが、昭和四七年（一九七二）東山区へ再移転した。二代以久は晩年京都伏見で過ごしたが、その際大雲院の門に入った。このため、伏見で死去した際は大雲院に葬られた。

高月院　高月院は、佐土原にあり大池山と号した。慶長一五年（一六一〇）、二代以久が死去した際、京都大雲院に葬られた。佐土原藩では仏日山大光寺に位牌を奉じて祀り、その後、慶長一七年（一六一二）に佐土原二代忠興が以久の三回忌に建立したのが高月院である。以降佐土原島津家の菩提寺とされた。以久が晩年大雲院の門にはいったことから、高月院は浄土宗の寺院である。

安養寺　安養寺は、鹿屋向江にあり池上山と号した。『垂城伝誌』に「鹿屋安養寺も心翁寺末寺なりしが今は楞厳寺末寺也」とある。曹洞宗の寺院で、慶長二年（一五九七）、四代久信が鹿屋の亀鶴城に移封の際、国分清水の楞厳寺から松堂和尚を伴ってきて創建したとされる。『隅府温故集』に「御仏餉米毎年壱五斗宛」とある。寛文九年（一六六九）火災にあい、復興して元禄八年（一六九五）島津光久の位牌が預けられたこともあったという。四代久信の墓があったが、昭和四六年（一九七一）垂水に移された。

吉祥寺　吉祥寺は、江戸にあり永源寺の末寺で諏訪山と号した。曹洞宗の寺院である。長禄二年（一四五八）、太田道灌が江戸城築城の際、井戸の中から「吉祥」の金印が発見されたため、城内（現在の和田倉門内）に一宇を設け、「吉祥寺」と称したのが始まりとされる。天正一九（一五九一）に現在の水道橋一帯に移った。明暦三年（一六五七）の大火で類焼し、現在地（東京都文京区）に移転。僧侶の養成機関として梅檀林を持ち、一千余名の学僧が学び、幕府の昌平坂学問所と並び称されたと言う。五代久敏が葬られた。『隅府温故集』に「久敏公御石塔有り」とある。寛保三年（一七一八）、九代貴儔の代に久敏の神主が置かれ、日牌料を寄附している。

廣岳院　廣岳院は、江戸にあり醫王山と号する。曹洞宗の寺院である。文禄三年（一五九四）、全梁禅師が芝西久保丸山竜土にあった薬師堂を一寺として創建したのが廣岳院とされる。承応二年（一六五三）、現在地へ移転した。六代忠紀が葬られた。『隅府温故集』に「久重公御石塔有り」とある。

月橋院　月橋院は、京都にあり指月山と号した。曹洞宗の寺院である。室町時代（正確な年代不明）、後土御門天皇が父後花園天皇を弔うため般若三昧院を建立。天正年間（正確な年代不明）、豊臣秀吉の伏見城築城に伴い西陣に移転。その後、跡地に建立されたのが真言宗の寺院、指月山円覚寺であった。文禄三年（一五九四）、円覚寺と向島を結ぶ豊後橋（観月橋）が竣工。竣工の日に豊臣秀吉が遊宴し月を愛でたことから月橋院と改めたと言う。慶長四年（一五九九）曹洞宗に改める。七代久治が葬られた。『隅府温故集』に「久治公御灰塚有り」とある。

ここまで、主に当主の菩提所について概観したが、夫人・子女の菩提所も整備されている。基本的には心翁寺に葬られているが、楞厳寺（曹洞宗）、龍峯寺（曹洞宗）、浄珊寺（曹洞宗）臨海庵（曹洞宗）、華厳寺（法華宗）などがある（表3・4）

龍峯寺　龍峯寺は、都城にあり長城山と号した。曹洞宗の寺院で、都城島津氏八代北郷忠相が母松庵妙椿大姉のために創建したとされる。開山は起宗和尚で、起宗和尚は初め帖佐城主豊州島津家の菩提寺総禅寺を開き、のち龍峯寺を開いたとされる。江戸時代は寺領一〇〇石～二〇〇石が給せられていたが、慶応二年（一八六六）廃寺となった。垂水島津家二代以久夫人が葬られた。

浄珊寺　浄珊寺は、垂水新城にあり撑月山と号した。『隅府温故集』に「初心翁寺末寺にて候近代福昌寺末寺に成る」とある。垂水島津家三代彰久夫人新城が、父義久の供養のため慶長一九（一六一四）に楞厳寺の末寺として貫明寺を建立するが、正保二年（一六四五）、新城島津家初代久章が谷山で誅され新城島津家が廃されたため廃絶した。久章の子忠清は承応二年（一六五三）、姓を末川と改め新城島津家を再興、新城島津家二代目となった。このため貫明寺が再建された。寛永一八年（一六四一）、新城が死去したため貫明寺に葬られるが、その際新城の法諡をとって浄珊寺と改めた。

清泉寺　清泉寺は、谷山にあり宝福寺の末寺で如意山と号した。曹洞宗の寺院で、百済の日羅上人の開山とされる。一時廃れたが、応永年間（一三九四～一四二七）に寛卍和尚に再興され、島津氏の庇護を受けたとされる。明治二年（一八六九）の廃仏毀釈により廃寺となった。垂水島津家四代久信の庶子であり新城島津家初代久章の墓がある。

長年寺　長年寺は、加治木にあり福昌寺の末寺で松齢山と号した。曹洞宗の寺院である。大樹（寿）寺ともいい、昔から加治木城麓にあったが、宗家一七代義弘が加治木屋形へ移転後、鬼門に当たることになったため、寛永一四年（一六三七）ごろ、現在地へ移ったとされる。寛文九年（一六六九）、加治木島津家により福昌寺末寺松齢山長年寺と改称された。垂水島津家九代貴澄の娘であり、宗家二四代重年夫人であり、宗家二五代重豪の母でもある冨（都美）の墓がある。

臨海庵　臨海庵は垂水海潟にあり、心翁寺の末寺で宝聚山と号した。心翁寺二世丹露和尚開基。『隅府温故集』に「寛永八年（一六三一）高二斗四升六合元和九年（一六二三）高同」とある。九代貴儔次男清五郎が葬られた。

（三）心翁寺の沿革

心翁寺は曹洞宗寺院で、宝厳山と号した。本尊は釈迦如来で国分清水の楞厳寺の末寺である。

永禄四年（一五六一）、父忠将菩提のため垂水島津家二代以久が清水楞厳寺の境内に心翁院を築き、塔頭とした。開山は楞厳寺一四世松堂会龍和尚とされる。

文禄四年（一五九五）、垂水島津家三代彰久が朝鮮で病に倒れたため、二代以久は彰久の遺体を持ち帰り楞厳寺に葬った。このとき三代彰久の法諡から二字をとり、心翁院を天宗寺と改め、宝厳山（忠将室の法名）とした。

「『垂水領主島津家家譜』によると、二代以久は文禄四年の秀吉の検地に拠り、種子島、永良部島、屋久島の三島一万石を知行するよう朱印を賜り、慶長二年（一五九七）に種子島へ移っている。その際天宗寺を種子島の内ノ池田に移した。慶長四年（一五九九）、二代以久は宗家一八代家久より、大隅垂水一万一六八七石を賜ったため、垂水城（元垂水）へ移った。その際、宝厳山天宗寺を垂水へ移したとされる。一方、『垂城伝誌』によると、慶長二年四代以久が鹿屋城へ入城した際、鹿屋へ天宗寺を移し、慶長九年（一六〇四）垂水へ来た際垂水へ移したとされる。知月和尚の代に五台山に改めるも、道国和尚の代に宝厳山に改めたとされる。い

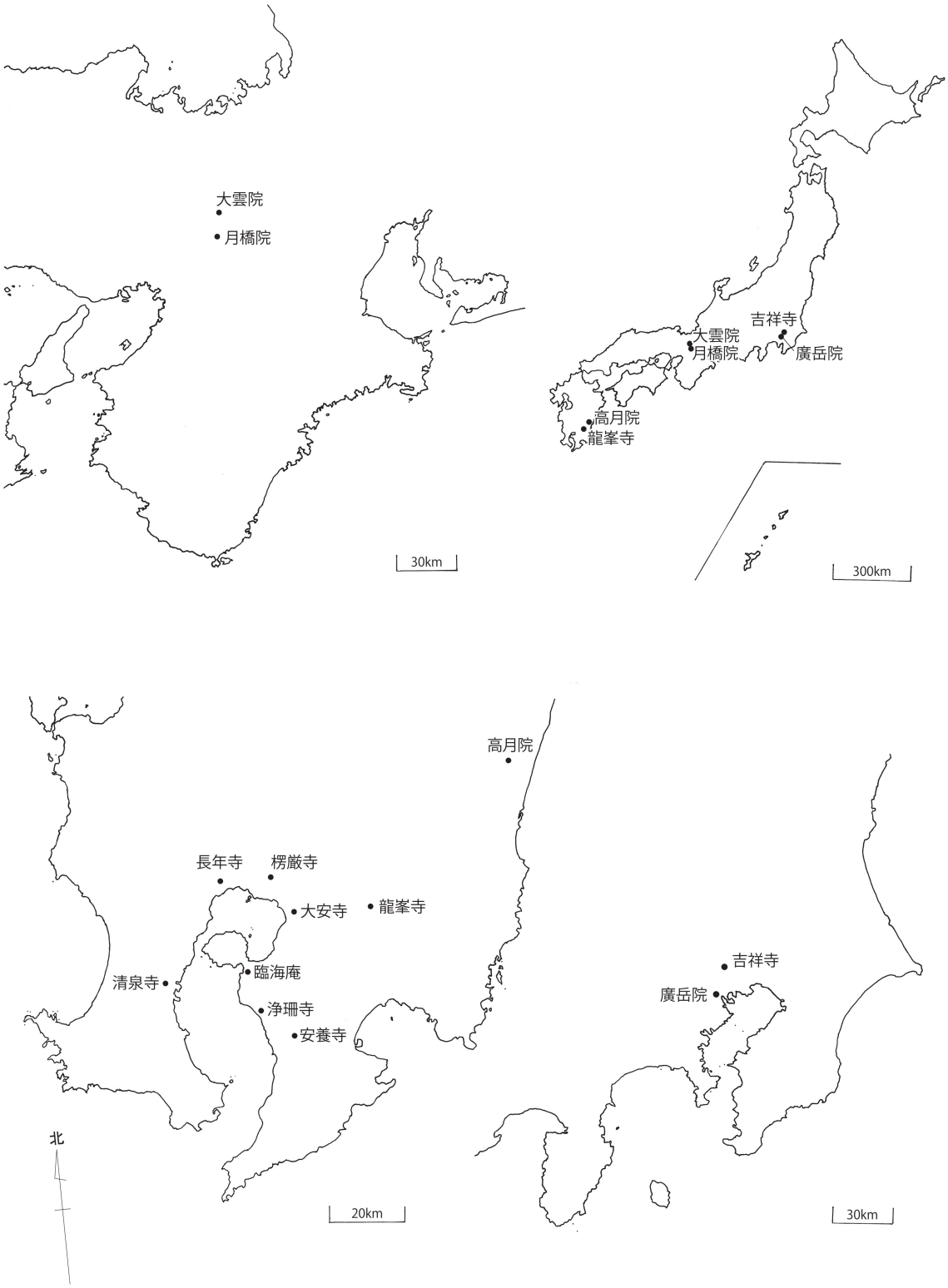

図４　垂水島津家菩提所位置図

表２　垂水島津家当主菩提所一覧

代	諱	没年	没地	本葬地 墓所	宗派	分霊地	法名				神号
							院殿号	道号	戒名	位号	
1	忠将	永禄4 1561	大隅国 福山廻城	楞厳寺	曹洞宗			心翁	大安	大居士	
2	以久	慶長15 1610	山城国 伏見	高月院	曹洞宗		高月院殿	照譽 (仁雄)	崇如	大居士	
3	彰久	文禄4 1595	朝鮮国 巨済島	楞厳寺	曹洞宗			天宗	慈雲	大禅定門	
4	久信	寛永14 1637	大隅国 鹿屋	安養寺	曹洞宗			昌嶽	元盛	居士	□最中御柱彦命
5	久敏	寛永元 1624	江戸	天宗寺 (心翁寺)	曹洞宗			節心	良忠	大居士	八□□□
6	忠紀	正保4 1647	江戸	節心寺 (心翁寺)	曹洞宗		陽廣院殿	鴻臚卿玉峯英関		大居士	
7	久治	元禄5 1692	山城国 伏見	心翁寺	曹洞宗		聚徳院殿	慈鑑	照海	大居士	百足八十圀祇命
8	忠直	正徳元 1711	鹿児島？	心翁寺	曹洞宗	高野山	性空院殿	浄海	即漚	大居士	
9	貴儔	寛政3 1791	大隅国 垂水	心翁寺	曹洞宗	高野山	量泰院殿	寛應	靜山	大禅伯	
10	貴澄	文化4 1807	大隅国 垂水	心翁寺	曹洞宗	高野山	景徳院殿	恕山	元宥	大居士	味凍能綾賢雄命
11	貴品	文化13 1816	鹿児島？	心翁寺	曹洞宗		宝覚院殿	仁峯	宗寛	大居士	
12	貴柄	天保4 1833	鹿児島？	心翁寺	曹洞宗		霊源院殿	皎雲	靜水	大居士	活霊足圀彦命
13	貴典	元治2 1865	大隅国 垂水	心翁寺	曹洞宗		賢徳院殿	仁翁	栖山	大居士	玉刻春壽長彦命
14	貴敦	明治23 1890	鹿児島？	心翁寺	曹洞宗						亀遊敦彦命

表３　垂水島津家当主夫人菩提所一覧

代	名	子	没年和暦	没年西暦	没地	本葬地墓所	宗派	分霊地	法名				神号
									院殿号	道号	戒名	位号	
1代忠将	(佐多上野守忠成の娘)	以久	天正2	1574	鹿児島？	楞厳寺	曹洞宗	清水郡田村の小城		宝厳	妙珍	大姉	
2代以久	(北郷左ヱ門時久の娘)	彰久 忠重 忠興	元和9	1623	都城池上	龍峯寺				老慶	龍樹	大姉	
3代彰久	新城(義久の娘)		寛永18	1641	大隅国垂水新城	浄珊寺	曹洞宗			瑚月	浄珊	庵主	
4代久信	(島津中務大輔家久の娘)	久敏	寛永5	1628	肥後国求麻					船月	窓鉄	大姉	月桂真浄姫命
6代忠紀	(桂山城守忠能の女)	久治	万治元	1658		節心寺(心翁寺)	曹洞宗			蘭秀	白芳	大姉	
7代久治	(光久二女)		元禄3	1690		心翁寺	曹洞宗		月清院殿	瑚窓	貞珊	大姉	月桂真浄姫命
8代忠直	(新納市正久珍の女)	鎌鶴、カル(貴儔夫人)	元文3	1738		心翁寺	曹洞宗		芳正院殿	元明	自覚	大姉	
9代貴儔	鎌鶴、カル(忠直の娘)	冨(重豪母) 久救	元文元	1736		心翁寺	曹洞宗		蓮池院殿	即心	成覚	大姉	
10代貴澄	(島津左衛門久甫の娘)	櫂、住、定(貴品夫人)	文政7	1824		心翁寺	曹洞宗		慈誠院殿	観月	妙相	大姉	
11代貴品	櫂、住、定(貴澄の娘)		天明6	1786		心翁寺	曹洞宗		清蘭院殿	玉室	貞香	大姉	
11代貴品	(島津図書久亮の娘)	貴柄	文化14	1817		心翁寺	曹洞宗		芳岸院殿	寒窓	梅玉	大姉	玉椿茂榮姫命
12代貴柄	(島津周防守忠救の娘)	貴典	文化14	1817		心翁寺	曹洞宗		涼相院殿	殊林	妙香	大姉	
12代貴柄	(義岡左平太久賢の娘)		文久3	1863		心翁寺	曹洞宗		清章院殿	観室	慈音	大姉	
13代貴典	(島津山城忠寛の娘)	貴敦	明治9	1876		川添別荘地内							眞注連張間姫命
14代貴敦	(南部遠江守信順の娘)	貴徳	明治10	1877		心翁寺	曹洞宗						心和八百足姫命

表４　垂水島津家当主子女菩提所一覧

代	母	名	没年和暦	没年西暦	没地	本葬地墓所	宗派	分霊地	法名 院殿号	法名 道号	法名 戒名	法名 位号	神号
1代忠将	（佐多上野守忠成の娘）	（女子）	天正9	1581						英中	節心	大姉	
1代忠将	（佐多上野守忠成の娘）	（女子）	寛永4	1627						楊窓	妙宣	大姉	
2代以久	（北郷左ヱ門時久の娘）	忠重	慶長5	1600					壽昌寺	両庵	定暁	居士	
2代以久	（原権兵ヱ尉の娘）	（女子）	寛文8	1668						花庭	玉蓮	大姉	
2代以久	（松木貞右ヱ門尉の姉）	忠興	寛永14	1637	江戸					宗誉	原隆	青蓮院	
2代以久	（岩本善兵ヱ尉の娘）	（女子）	（早世）							桂昌	労林	大姉	
4代久信	（池田六郎左ヱ門秋宗の娘）	久章	正保2	1645	谷山清泉寺	谷山清泉寺	曹洞宗			松月	庭柏	居士	
4代久信	（池田六郎左ヱ門秋宗の娘）	忠政	元和9	1623						幻心	聚泡	大禅定門	
4代久信	（池田六郎左ヱ門秋宗の娘）	千法師	慶長20	1615									精矛千足□命
4代久信	（隈元清右ヱ門の娘）	久眞	延宝7	1679						仙叟	雲英	居士	
4代久信	（中村九郎左衛門清安の娘）	久盈	寛文3	1663		新城浄珊寺	曹洞宗			心芳	得菴	居士	
6代忠紀	（桂山城守忠能の女）	菊千代（女子）											
8代忠直	（鎌田権右ヱ門政矩の娘）	安二郎、安千代丸	宝永5	1708		心翁寺	曹洞宗			秀嵩	幻松	童子	
8代忠直	（鎌田権右ヱ門政矩の娘）	カヤ（女子）	宝永6	1709		心翁寺	曹洞宗			露幻	稚白	童子	
8代忠直	（鎌田権右ヱ門政矩の娘）	鎌鶴、カル（貴儔夫人）	元文元	1736		心翁寺	曹洞宗		蓮池院殿	即心	成覺	大姉	
9代貴儔	鎌鶴、カル（忠直の娘）	冨（宗家24代重年夫人）	延享2	1745		加治木長年寺	曹洞宗		正覚院殿	貞範	妙雅	大姉	
9代貴儔	鎌鶴、カル（忠直の娘）	秀（女子）	享保14	1729		心翁寺	曹洞宗			高月	幻影	童子	
9代貴儔	鎌鶴、カル（忠直の娘）	鍋十郎	享保15	1730		心翁寺	曹洞宗			雪庭	幻消	童子	
9代貴儔	鎌鶴、カル（忠直の娘）	清五郎	享保16	1731		臨海庵	曹洞宗			覺本	幻性	童子	
9代貴儔	鎌鶴、カル（忠直の娘）	銀（女子）	天明4	1784		華厳寺	曹洞宗		清浮院殿	妙理	日解	大姉	
9代貴儔	（山下七右ヱ門秀明の娘）	久救（末川家）	文政10	1827	鹿児島								
9代貴儔	（肱岡伊佐左衛門長照の娘）	邦（女子）	明和9	1772					清霜院殿	覺妙	夫	大姉	
9代貴儔	（肱岡伊佐左衛門長照の娘）	奬苗	文化8	1811					廣源院殿	岷山	濫觴	大居士	
9代貴儔	（肱岡伊佐左衛門長照の娘）	庄次郎（久兼）	文化8	1811					宗観院殿	霊巌	克明	大居士	
9代貴儔	（肱岡伊佐左衛門長照の娘）	將親七之進	宝暦11	1761		心翁寺	曹洞宗		清雲院	圓明	月心	大居士	
9代貴儔	（肱岡伊佐左衛門長照の娘）	薫　峯（女子）	文化6	1809	佐土原				瑤林院殿	廉誉	馨室	大姉	
9代貴儔	（肱岡伊佐左衛門長照の娘）	長（女子）											
9代貴儔	（肱岡伊佐左衛門長照の娘）	將容彦十郎	宝暦11	1761					臺雲院殿	峨山	玄惠	大居士	
9代貴儔	（肱岡伊佐左衛門長照の娘）	傳（女子）	文政4	1821		心翁寺	曹洞宗		樹昌院殿	梅室	妙香	大姉	
10代貴澄	（島津左衛門久甫の娘）	（男子）	宝暦8	1758		心翁寺	曹洞宗		幻成	浮月	大禅	童子	
10代貴澄	（島津左衛門久甫の娘）	櫂、住、定（貴品夫人）	天明6	1786		心翁寺	曹洞宗		幻清蘭院殿	玉室	貞香	大姉	
10代貴澄	（島津左衛門久甫の娘）	智嘉（女子）											
10代貴澄	（島津左衛門久甫の娘）	道（女子）	享和3	1803					法薫院殿	心一	華鮮	大姉	
11代貴品	櫂、住、定（貴澄の娘）	圃袈裟（女子）	安永5	1776		心翁寺	曹洞宗			玉心	霜露	禅童女	
11代貴品	（島津図書久亮の娘）	欽（女子）	寛政9	1797		心翁寺	曹洞宗			幻珍	淨玉	大禅童女	
12代貴柄	伊尾（林安右ヱ門昌世の妹）	謙次郎（斉宣令子）	文化4	1807		心翁寺	曹洞宗		瑤樹院殿	嫩窓	幻桂	大禅童子	
12代貴柄	（島津周防守忠救の娘）	久冨											
12代貴柄	（島津周防守忠救の娘）	將雄	文政9	1826		心翁寺	曹洞宗		英章院殿	芳含	智雄	大居士	小夷‥‥命
12代貴柄	（島津周防守忠救の娘）	將清											
12代貴柄	（義岡左平太久賢の娘）	將盈	天保5	1834		心翁寺	曹洞宗		淳聰院殿	天質	智暁	大居士	
12代貴柄	（義岡左平太久賢の娘）	經、寛（女子）	万延元	1860					松仙院殿				
12代貴柄	（義岡左平太久賢の娘）	將苗											
13代貴典	（島津山城忠寛の娘）	雅（女子）	天保5	1834		心翁寺	曹洞宗		芳臺院殿	瑤池	貞薫	大禅童女	
13代貴典	（島津山城忠寛の娘）	尚次郎	天保5	1834		心翁寺	曹洞宗			圭林	幻光	禅童子	
13代貴典	（島津山城忠寛の娘）	保（女子）											
13代貴典	（島津山城忠寛の娘）	將堅	明治4	1871									
13代貴典	（島津山城忠寛の娘）	銀（女子）	天保9	1838		心翁寺	曹洞宗			湖海	幻殊	禅童女	‥口根□咩命
13代貴典	（島津山城忠寛の娘）	哲袈裟	天保14	1843		心翁寺	曹洞宗		哲相院殿	秋苗	不秀	禅童子	
13代貴典	（永江伊兵ヱの娘）	筆（女子）											
13代貴典	（渡辺伝右ヱ門の娘）	竹、幸（女子）											

ずれにしろ、慶長年間の初期から中ごろにかけての時期に垂水へ移されたものと考えられる。

『三国名勝図会』によると、垂水に建立された心翁寺敷地は元々、島津家の前、伊地知氏が垂水を治めていた頃、高寺という伽藍が所在しており、高寺が破壊された跡地であったという。しかし、この高寺についての記録は殆ど無く、詳細は不明である。

寛永元年（一六二四）年、垂水島津家五代久敏は江戸で病没したが、その後寛永三年（一六二六）、天宗寺は久敏の法号から節心寺に改められる。

延宝七年（一六七九）、垂水島津家七代久治は節心寺を心翁寺と改めた。このとき大安寺に二〇石、楞厳寺に一〇石を寄付し祖先の菩提を弔い、忠将から久治までの系図を、大安寺、楞厳寺、心翁寺に納めたとされる。また久治は、延宝八年（一六八〇）、初代忠将、代以久の位牌を心翁寺に安置した。さらに、延宝九年（一六八一）には四代久信の位牌を安置している。

元禄四年（一六九一）、清国福州の明哲和尚（臨済三三世）に「宝厳山」の額を書かせ、これを客殿に掲げた。

安永五年（一七七六）、垂水島津家一〇代貴澄は宗家一五代貴久とその父忠良の位牌を心翁寺に安置。

初代忠将、三代彰久は清水楞厳寺に、二代以久は佐土原高月院に、四代久信は鹿屋安養寺に葬られており、心翁寺に垂水領主が葬られるのは五代久敏以降のことである。それ以降は垂水島津家の菩提寺としての位置を確立している。なお、五代久敏は江戸吉祥寺に葬られ、六代忠紀は江戸廣岳院で葬られた後遺骨が節心寺に葬られ、七代久治は京都伏見の月橋院に葬られた後遺骨が心翁寺に葬られている。実際に垂水で領主が亡くなり、心翁寺に葬られるようになるのは八代忠直以降のことである。

心翁寺の寺領について、慶長一一年（一六〇六）の高張によるとされる『垂城録』には「知行高百参拾石余　寺地御免地」、元和九年（一六二三）の高張には「高七拾石弐升弐号　天宗寺」とある。正保二年（一六四五）の縄張帳（図6）が現存しているが、残念ながら心翁寺の全容は記されていない。心翁寺は末寺を多く有し、田上村の龍門軒、金蔵寺、福寿寺、垂水村の西福寺、宗福寺、海潟村の松岳寺、臨海庵があった。

『三国名勝図会』の挿絵（図5）によると、門前の仁王像、方丈や客殿、本堂等

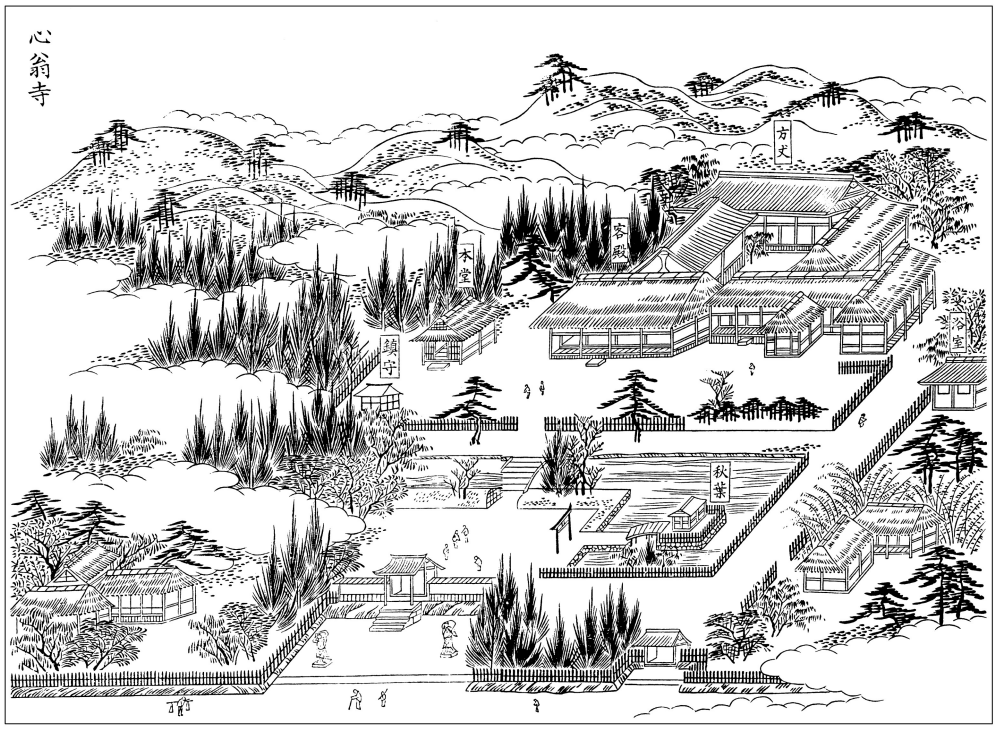

図5　『三国名勝図会』の心翁寺

図６　正保二年（1645）の縄張帳（一部）

表５　心翁寺略歴

年号	和暦	月日	西暦	内容	当主
永禄	4		1561	父忠将菩提のため二代以久が清水楞厳寺の境内に塔頭心翁院を建立。開山松堂会龍和尚。	以久
文禄	4		1595	７月５日、三代彰久が朝鮮で病没。遺骨は楞厳寺に葬られる。このとき彰久の法諡から二字をとり、心翁院を天宗寺と改め、宝厳山と号した。	以久
慶長	2		1597	二代以久、清水から種子島へ移る際、天宗寺を種子島の内ノ池田に移す。	以久
慶長	4		1599	二代以久、種子島から垂水へ移る際、天宗寺を垂水城下へ移す。	以久
寛永	3		1626	寛永元年に江戸で病没した五代久敏の法号から、天宗寺を節心寺と改める。	久信
正保	4	11月12日	1647	六代忠紀、８月22日江戸で没。廣岳院に葬られる。10月18日、遺骨が垂水へ運ばれ、11月12日に節心寺へ葬られる。	久治
延宝	7	10月	1679	節心寺の名称を心翁寺に復す。	久治
延宝	8	5月19日	1680	初代忠将、二代以久の位牌を心翁寺に安置。	久治
延宝	9	5月19日	1681	四代久信の位牌を心翁寺に安置。	久治
元禄	4		1691	清国福州の明哲和尚に「宝厳山」の額を書かせ、客殿に掲げる。	久治
元禄	5	8月21日	1692	七代久治、７月27日伏見で病没。月橋院に葬られる。遺骨は垂水へ運ばれ、８月21日心翁寺で葬式。導師は南林寺の吉州淳長和尚。	久治
正徳	元	6月25日	1711	八代忠直死去。心翁寺で葬式。導師は福昌寺の大春和尚。	貴儔
正徳	3		1713	八代忠直の遺髪を高野山に供養。	貴儔
寛延	3	4月19日	1750	九代貴儔、宗家二三代宗信の遺髪を高野山へ供養のため運ぶ。	貴儔
寛政	3	3月10日 5月7日	1791	九代貴儔死去。心翁寺で葬式。導師は福昌寺の岱田和尚。 九代貴儔の遺髪を高野山へ供養。	貴澄
文化	4	3月5日	1807	一〇代貴澄死去。心翁寺で葬式。導師は福昌寺の自厳和尚。	貴品
文化	5	1月28日	1808	一〇代貴澄の遺髪を高野山へ供養。	貴品
文化	13	5月7日	1816	一一代貴品死去。心翁寺で葬式。導師は福昌寺の自厳和尚。	貴柄
天保	4	10月4日	1833	一二代貴柄死去。心翁寺で葬式。	貴典
元治	2	1月18日	1865	一三代貴典死去。心翁寺で葬式。導師は心翁寺の知證和尚。	貴敦
明治	2		1869	廃寺	貴敦
明治	23	5月20日	1890	一四代貴敦死去。心翁寺で葬式。	貴徳

表６　心翁寺歴代住職

代	名前	解散・住持暦・事績等	備考　出自（地名）
開山	松堂会龍	楞厳寺一四世。太平山福寿寺中興開山。	
2世	丹露	岩淵山龍門軒開山。寿岳山西福寺開山。宝聚山臨海庵開山。	
3世	白翁	如意山宗福寺開山。亀水山龍福院開山。瑞龍山金蔵寺開山。	
4世	龍谷	井上山松岳寺開山。白石山玉照寺開山。	
5世	見外	黒瀬村宝寿山常林寺開山。	
6世	慈船		
7世	禅室		
8世	東屋	海南山金蔵寺開山。	
9世	道翁		
10世	梅光		
不明	知月	宝厳山心翁寺を五台山に改める。	
不明	道国	五台山を宝厳山に復した。	
不明	知證	一三代貴典の葬式を執り行う。	

※心翁寺の住職についての記述は非常に少なく、『垂城録』、『隅府温故集』、『垂城伝誌』に記載の見られる住職についてのみ掲載した。

が描かれており、広大な敷地を有していたことがうかがえる。また、境内の池中に秋葉宮、門側には天照大神宮があったとされる。「当寺の殿宇結構壮麗にして、華彩日に映ず」と記されており、往時の心翁寺の様子を偲ばせる。

また、七代久治の臣下であった坂元十右ヱ門盛基は、元禄四年（一六九一）、宗家二〇代綱貴に従い江戸に行った七代久治に随行。翌五年（一六九二）。江戸で病没した久治の遺骨に従い帰垂。七月に剃髪し惠安と名を改め、妻子と別れ、心翁寺に庵を結び、享保一〇年（一七二五）亡くなるまで久治の菩提を弔った。惠安の死後心翁寺内に亀趺碑が建立されている（石造物の項参照）。惠安の庵は心翁寺本門の西の地にあったとされる。

明治になると藩の宗教政策の転換期を迎える。明治二年（一八六九）廃寺となり、寺院としての機能を失う。しかし、寺院の一角は領主墓所としての機能を継続させ、垂水島津家一五代貴徳、垂水島津家一六代貴暢夫婦の墓碑が存在している。